

倭における国家形成と 古墳時代開始のプロセス

Processes of Starting the Kofun Period and Building a Nation in the Wa State

岸本直文

KISHIMOTO Naofumi

はじめに

① ¹⁴C年代の検討

② ヤマト国の形成

③ ヤマト国の評価

④ ヤマト国本拠としての纏向遺跡の形成

⑤ 纏向型前方後円墳論

⑥ 古墳時代の定義

⑦ 倭における国家形成論のために

おわりに

【論文要旨】

1990年代の三角縁神獣鏡研究の飛躍により、箸墓古墳の年代が3世紀中頃に特定され、〈魏志倭人伝〉に見られる倭国と、倭王権とが直結し、連続的發展として理解できるようになった。卑弥呼が倭国王であった3世紀前半には、瀬戸内で結ばれる地域で前方後円形の墳墓の共有と画文帯神獣鏡の分配が始まっており、これが〈魏志倭人伝〉の倭国とみなしうるからである。3世紀初頭と推定される倭国王の共立による倭王権の樹立こそが、弥生時代の地域圏を越える倭国の出発点であり時代の転換点である。古墳時代を「倭における国家形成の時代」として定義し、3世紀前半を早期として古墳時代に編入する。

今日の課題は、倭国の主導勢力となる弥生後期のヤマト国の実態、倭国乱を経てヤマト国が倭国の盟主となる理由の解明にある。一方で、弥生後期の畿内における鉄器の寡少と大型墳墓の未発達から、倭王権は畿内ヤマト国の延長ではなく、東部瀬戸内勢力により樹立されたとの見方もあり、倭国の形成主体に関する見解の隔たりが大きい。

こうした弥生時代から古墳時代への転換についても、¹⁴C年代データは新たな枠組みを提示しつつある。箸墓古墳が3世紀中頃であることは¹⁴C年代により追認されるが、それ以前の庄内式の年代が2世紀にさかのぼることが重要である。これにより、纏向遺跡の形成は倭国形成以前にさかのぼり、ヤマト国の自律的な本拠建設とみなしうる。

本稿では、上記のように古墳時代を定義するとともに、そこに至る弥生時代後期のヤマト国の形成過程、纏向遺跡の新たな理解、栢築墓と纏向石塚古墳の比較を含む前方後円墳の成立問題など、新たな年代観をもとづき、現時点における倭国成立に至る一定の見取り図を描く。

【キーワード】 ヤマト国 纏向遺跡 前方後円墳 倭国 古墳時代

はじめに

¹⁴C年代は、弥生時代後期から古墳時代初頭の年代観についても新たな枠組みを提示しつつある。この時期の考古資料による暦年代観については、従来は中国鏡が大きな役割を担い、とくに1990年代の三角縁神獣鏡研究の進展により、箸墓古墳の年代が3世紀中頃に特定できることが明らかにされた。これにより、〈魏志倭人伝〉に見られる3世紀前半の倭国と、前方後円墳や三角縁神獣鏡の波及から考えられてきた倭王権とが直結し、連続的・発展的に考えることができるようになる。もはやヤマト国が畿内であることは自明である〔岸本2010b〕。

卑弥呼生前の3世紀前半には、既に前方後円形の墳墓とその共有（いわゆる纏向型前方後円墳）、また画文帯神獣鏡の分配が始まっており、この時期を古墳時代に編入する寺澤薫の見解〔寺澤2000〕を支持する。その一方、なお3世紀前半を弥生時代終末期とする見解も残存する。弥生時代と古墳時代の時代区分については、まだ共通理解に達していないのである。

また、その古墳時代を、国家として位置づける都出比呂志の見解がある一方〔都出1991〕、国家といえる段階に達するのは5世紀後半の雄略朝とする見方も強い（〔岩永2002〕ほか）。しかし、日本の古代国家の出発点が卑弥呼共立にあり、地域国家の割拠状態に進む可能性のあった弥生時代後期の地域圏が、早々により大きな枠組みの形成に進んだことを重視すべきであり、これが日本の国家形成の特質のひとつと考えている。そして、弥生後期の地域圏形成と、その早期の統合による倭国形成に、鉄器化の進行が大きく作用したとみる意見〔都出編1998〕を支持する。

日本史上の時代の転換は、2世紀後葉の倭国乱を経ての、3世紀初頭と推定する倭国王共立にあり、これが日本の国家形成の第一歩であり、古墳時代の開始と位置づけることにしたい。古墳時代は「倭における国家形成の時代」として定義する。

今日的な課題は、倭国の主導勢力となる畿内ヤマト国の内実、倭国乱の実態解明、それを経てなげにヤマト国を中心に倭国形成に至るのかという点に進んでいる。しかし、弥生時代後期の畿内における鉄器の少なさや大型墳丘墓の欠落、前方後円墳に継承される墳墓の諸要素が瀬戸内東部の弥生墓に求められることから、3世紀初頭に誕生する倭王権は、弥生後期の畿内社会の延長になく、瀬戸内東部勢力により大和に樹立されたとの見方もある〔寺澤2000・北條2000b〕。纏向遺跡や纏向型前方後円墳の造営は確かに突然であるように見え、倭王権成立の経緯や主体、つまり倭国形成の理解には大きな差が横たわっている。古墳時代の始まりを考える上で、考古学的事象と、〈魏志倭人伝〉からうかがえる2世紀後葉の倭国乱や3世紀初頭の倭国王共立をあわせて考えることが必要であるが、そのためには、考古学的事象の年代が正確でなければならない。

しかし、箸墓古墳の築造年代が3世紀中頃に特定できても、時代の転換点である2世紀末から3世紀初頭が、土器様式のどこにあたるかといえば、木製品の年輪年代値が参考になってきたが、土器そのものの年代はわからず推定にとどまらざるをえなかった。こうした課題に対し、¹⁴C年代は、土器に残る炭化物をもとに、土器そのものの年代を科学的に求めることを可能とし、測定データを蓄積することにより、土器編年各段階の時期を絞り込むことが可能になりつつある。

これまで、纏向遺跡の形成＝庄内式の開始という考古学的事象を、文献から判明する2世紀末か

ら3世紀初頭の倭国の成立を反映するものとする見方が有力であったが、¹⁴C年代によると庄内式は2世紀にさかのぼり、⁽¹⁾そうではないことが明らかになってきている。

本稿では、いまだ測定データが十分ではないにしても、現時点での¹⁴C年代データにもとづく土器様式各段階の年代により、考古学的事象を暦年代の上に配置し、これにより弥生時代から古墳時代への転換を考えるものである。また、畿内の弥生後期社会に対する低い評価について疑問があり、これは年代観と関係なく客観的に比較されるべきことではあるが、これも正確な年代的対応関係の上に、弥生時代の現象を配列してなされる必要がある。そこで、弥生時代後期のヤマト国形成とその内実、纏向遺跡形成の意味、前方後円墳の成立過程、倭国の成立について、国立歴史民俗博物館による¹⁴C年代にもとづき、一定の見取り図を描いてみることにする。

①……………¹⁴C年代の検討

最初に、国立歴史民俗博物館（以下「歴博」とよぶ）による¹⁴C年代データの検討を行う〔春成ほか2011〕。年代測定は奈良盆地の資料について実施したものであり、土器の時期区分は大和の弥生土器および古式土師器の編年による。比較的確実なことがいえる布留式から始める⁽²⁾（図1）。

(1) 布留0式と布留1式の年代

布留1式の資料については、日本考古学協会大会発表時からは、纏向遺跡と唐古・鍵遺跡の資料9点が追加された。これによって270年頃のボトムに布留1式が位置するとみる点について、東田大塚古墳出土資料に依存していた問題〔新納2009〕は、ある程度解消された。

布留0式 布留0式に築造された箸墓古墳の年代は3世紀中頃に求められ〔岸本2004c〕、¹⁴C年代についても、270年のボトムに向かって下降するJcalの帯のなかに位置づけることができる。データの多くは、270年のボトムを介して両側のJcalの帯にあてはまるが、布留0式の測定データには、300年代前半のピークより高いものが含まれており、ボトムの前に位置づけ得る。

布留1式 古墳の年代観から3世紀後半を中心とする時期と考えられることと整合し、ボトムに相当するデータを含め、ボトムに達したあと上昇するJcalの帯におさまる。

布留2式 布留2式のデータは少ないが、2点のデータは、270年のボトムのあとの上昇した横ばいのピーク、すなわち3世紀末から4世紀前葉に相当する。布留1式との交替期は厳密には不明であるが、4世紀初頭から前葉のなかにあり⁽³⁾そうである。

布留2式期を含め、それ以降については、さらなるデータの蓄積を待つとして、3世紀代については、ボトムの底に相当する値は布留1式にはあるが、布留0式にはなく、布留0式は3世紀中葉に、布留1式が270年前後を含む3世紀後葉に位置づけて問題なからう。

(2) 庄内式の年代

庄内3式 庄内式は、庄内0式のあと、庄内1式・2式・3式と区分される〔寺澤1986〕。布留0式の前様式である庄内3式については、布留0式が3世紀前半から中頃を中心とすることと整合的に、2世紀末から3世紀前葉にあてうる結果が得られている。2世紀のJcalは横ばいであり、3世

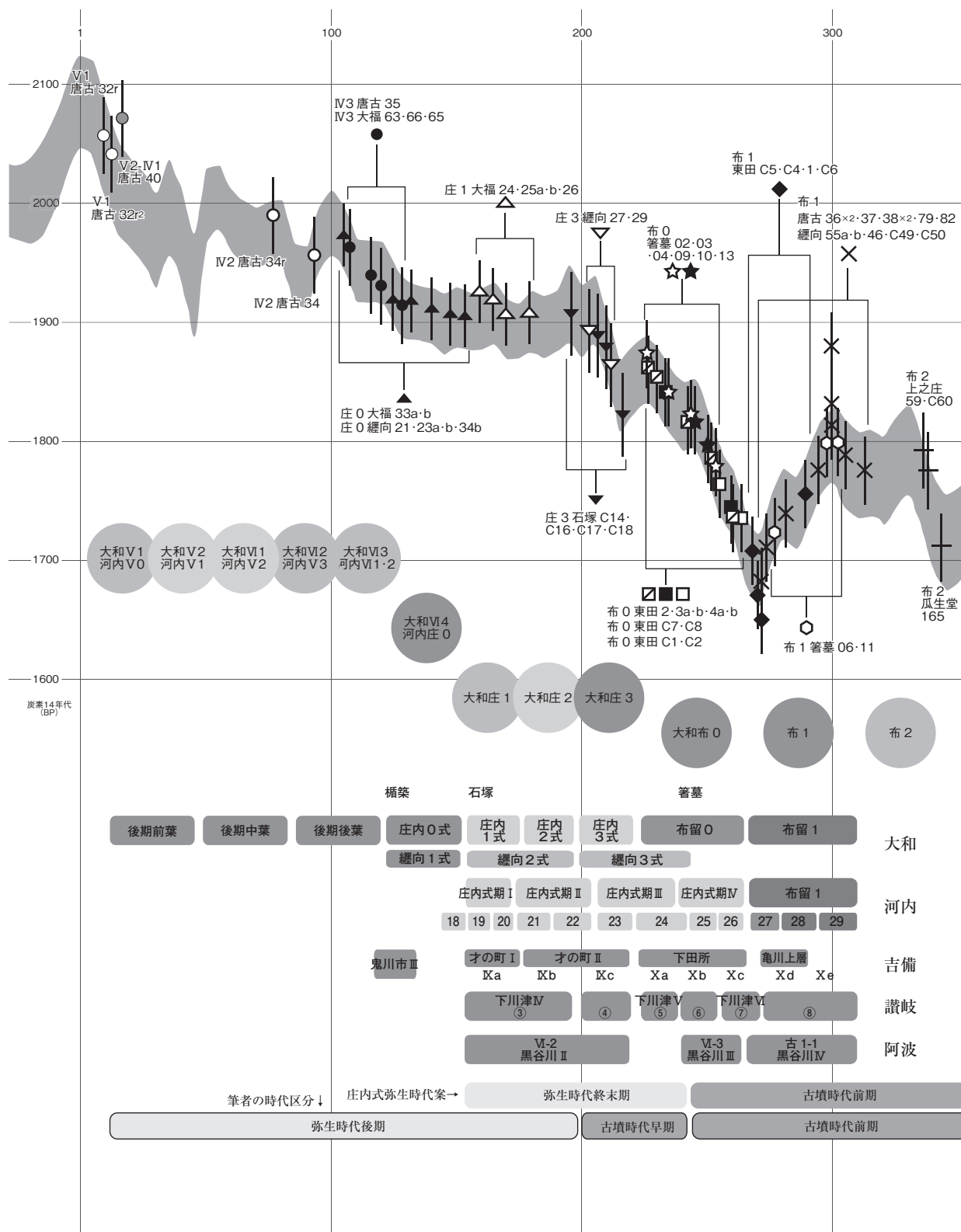


図1 1世紀から3世紀の ^{14}C 年代

紀に入ると下降を始めるが、庄内3式のデータは、その部位に相当すると考えることができる。3世紀前葉を中心とする時期と考えてよいだろう。

庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式） 寺澤が大区分として庄内式に含め、新たな庄内様式の開始期とした庄内0式（纏向1式）は、「第Ⅴ様式土器」をほぼ継承するものだが、庄内式に器種組成に加わる小型土器が出現することを重視したもので〔寺澤1986〕、大和では庄内型甕は未成立で、藤田三郎らは「第Ⅴ様式土器」の末期に位置づけⅥ4様式とする〔藤田・松本1989〕。

庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）は、2世紀の横ばいのデータに整合し、大福遺跡の数字がやや離れているが、纏向遺跡のデータでも2世紀はじめの上昇部にむかうようなデータがあり、第2四半期頃を中心とする2世紀前半とみることができるだろう。

庄内1式・2式 したがって庄内1式・2式は、2世紀前半を中心とする庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）と、3世紀前葉の庄内3式との間の、およそ2世紀後半に位置づけられる。ただし、庄内1式のデータは（庄内2式はデータなし）、庄内0式（＝纏向1式≡Ⅵ4式）と変わりなく、2世紀前半でもおかしくない。しかし、庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）のデータのまとまりから、庄内1式・2式を2世紀後半の前半と後半に割り振ることにする。

庄内式については、庄内3式の位置が決定できること、庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）の位置がおおよそ2世紀前半にあたると考え、各様式の年代を案分したが、庄内甕の成立する庄内1式の時期を固めることは重要であり、さらなるデータの蓄積が求められる。

(3)「第Ⅴ様式土器」の年代

従来の弥生時代後期の土器様式としての畿内「第Ⅴ様式土器」について、河内・大和ともに、考え方は異なるが、それぞれ第Ⅴ様式と第Ⅵ様式に区分する〔寺澤1989〕。大和における弥生土器と庄内式土器の区分には考え方に差があるが、庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）より前について、細分された第Ⅴ様式と第Ⅵ様式をあわせて、ここでは「第Ⅴ様式土器」と呼んでいる。

「第Ⅴ様式土器」は、庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）を2世紀前半に置くならば、その前に、大和で5段階（Ⅴ1・Ⅴ2・Ⅵ1・Ⅵ2・Ⅵ3）、河内で6段階（Ⅴ0・Ⅴ1・Ⅴ2・Ⅴ3・Ⅵ1・Ⅵ2）が入るが、歴博の配置ではかなり窮屈である。そこでヤマトⅣ3の位置について変更を加えた。

大和Ⅴ1式（＝河内Ⅴ0）「第Ⅴ様式土器」すなわち弥生時代後期初頭のⅤ1式のデータは、これまで河内における貨泉の出土から1世紀前半にあると考えられてきたところであり〔森岡1998〕、2点のデータは、1世紀前葉のなかにあり問題はないであろう。

大和Ⅵ2式（＝河内Ⅴ3式） 大和Ⅵ2式のデータは2点しかなく、流動性が高いが、大和Ⅴ1式（河内Ⅴ0式）のあと、大和Ⅴ2（河内Ⅴ1）・大和Ⅵ1（河内Ⅴ2）の二様式が入るので、歴博が1世紀後半に置いていることは妥当であろう。

大和Ⅵ3式（河内Ⅵ1・2式） 大和の拠点集落の環濠が埋められる重要な時期である。直後の庄内0式（＝纏向1式≡大和Ⅵ4式）は2世紀前半に中心があるが、100年頃のピークに近いデータがあることから、歴博は大和Ⅵ3（河内Ⅵ1・2）を、1世紀末のJcal帯の落ち込みに対応させる。しかし、「第Ⅴ様式土器」全体が1世紀に収まるとみことは困難であり、大和Ⅵ3（河内Ⅵ1・2）のデータは、2世紀前葉に下らせることが適当と考える。5期に区分される大和の「第Ⅴ様式土器」は、現時点

では、1世紀前葉から2世紀前葉になるとみた方がよいと思う。

「第Ⅴ様式土器」の年代観については、現時点ではデータが乏しく、開始期と後続する庄内式からおおよその時期幅が推測できる段階であり、測定データの蓄積が望まれる。

(4) 現時点の年代観

データの精粗がある段階で確定的なことがいえない部分は残るが、歴博による¹⁴C年代測定により、一定の年代観が得られていると考える。「第Ⅴ様式土器」については、1世紀のなかに押し込むよりも、2世紀前葉までの間で捉え、庄内0式(纏向1式≒大和Ⅵ4)を2世紀第2四半期頃を中心にもつと考え、庄内1式を2世紀後半の前半期に、庄内2式を2世紀後半の後半期にあたると考えておく。布留式期についてはあまり問題はないだろう⁽⁴⁾。

②……………ヤマト国の形成

弥生時代中期末の紀元前1世紀、北部九州のナ国とイト国が二大国に成長し、楽浪郡を介して中国王朝と結びつき、北部九州に大きな影響力をおよぼしていた。東方の社会では、入植以来の集落への集住が進み環濠集落の規模を拡大させ、河川ごとに拠点集落を中心とする単位がでそろい、時に戦争にいたる緊張も高まっていた。東日本では農耕社会が定着した頃である。

1世紀に入ると激動の弥生時代後期となる。北陸や濃尾平野までの西日本諸地域において、急速に広域地域圏が形成される。土器の地域色が強まり、独自の大型墳墓を発展させる地域も現れてくる。弥生時代後期に形成される畿内圏もそのひとつである。

以下、弥生時代後期についての言及においては、前葉(河内Ⅴ0・1, 大和Ⅴ1・2)、中葉(河内Ⅴ2・3, 大和Ⅵ1・2)、後葉(河内Ⅵ1・2, 大和Ⅵ3)の区分も用いる[赤塚2002: 榎考研2005]。

(1) 畿内における集落の再編

近畿地方の弥生時代中期までの拠点集落は、後期に入ると存続しないものが多い。池上曾根遺跡や安満遺跡が代表例であるが、近畿地方の多くの拠点集落が継続しないで解体する。集住していた人々は分散し、後期の集落は小規模になる。大規模な高地性集落へ移動したとみられる地域もあるが一時的で、ほどなく他地域と同じように小規模集落が広がる。このことは、偶発的な事態が生じたものでなく共通した外的要因が働いているとみられる。約500年間にわたって居住してきた拠点集落の廃絶には、きわめて大きな強制力が作用したはずである。銅鐸の埋納はこれと連動する。近年では、銅鐸埋納に二段階があることが指摘され、集落で保管してきた最古段階の菱環鈕式、古段階の外縁付鈕式、そして中段階の扁平鈕式銅鐸が、扁平鈕式が生産された中期後葉からまもない時期に埋納されたとみられている。これは後期における拠点集落の廃絶と連動し、長年住み続けた拠点集落の解体にともなって埋納されたと理解できる[福永1998]。

しかし、多くの地域で拠点集落が解体するなかで、中河内や大和南部の拠点集落は存続する。河内の亀井遺跡や大和の唐古・鍵遺跡⁽⁵⁾が代表である。また、弥生時代後期にあたる「第Ⅴ様式土器」の無文化をいち早く実現するのは生駒西麓の中河内地域である[濱田2000]。「第Ⅴ様式土器」は、

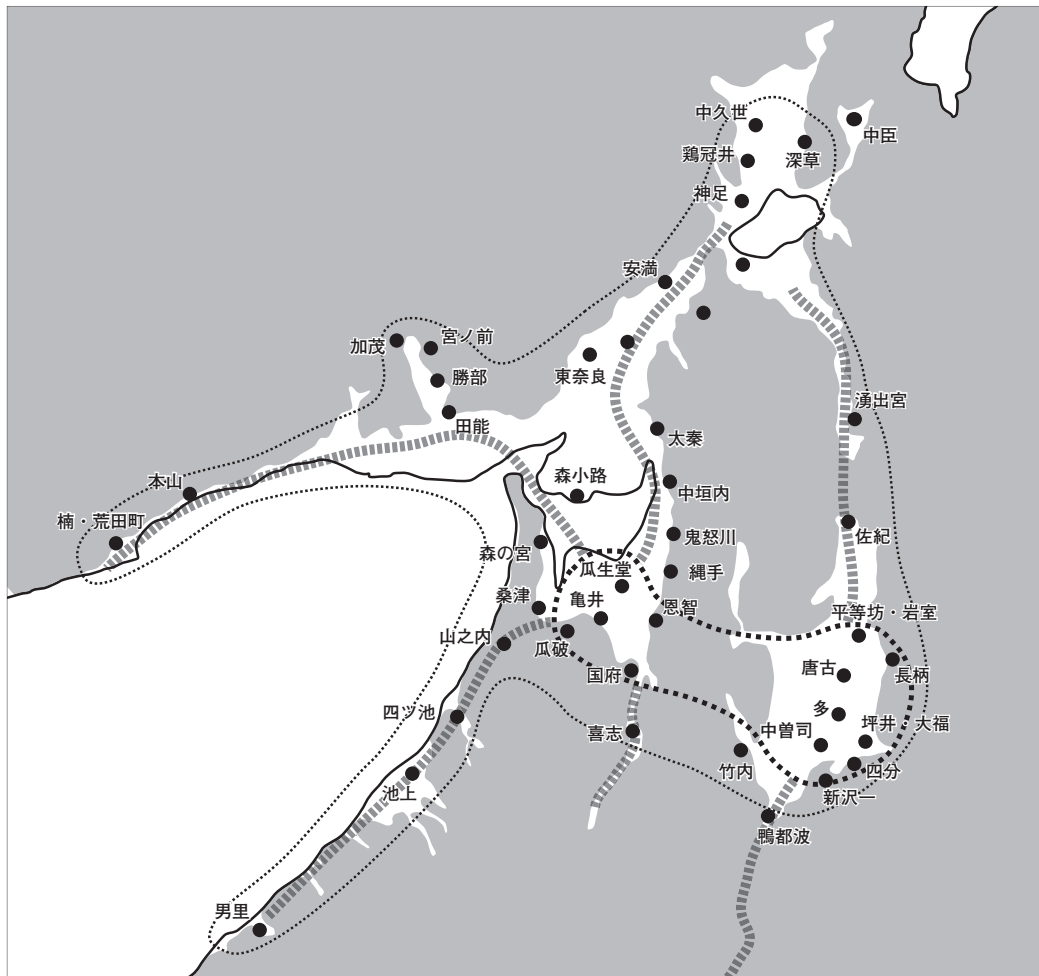


図2 ヤマト国の形成過程

中河内・大和南部において成立した土器であり、摂津や和泉などでは後期前葉の土器は多くなく、「第Ⅴ様式土器」の普及は遅れるとみている。

近畿地方の弥生土器は、前期の土器を母とし、器形・口縁部形態・紋様など、それぞれの地域で独自化が進んでいたが、それが後期に「第Ⅴ様式土器」に斉一化する。約500年を要して変化を遂げてきた日常土器の共通化は、統合を図る力が働かなければ成し遂げられないであろう。

「第Ⅴ様式土器」を主体的に生み出したのは中河内・大和南部であり、この地域の拠点集落が存続することから、中河内・南大和の主導勢力が畿内圏を形成したとみる。後期前葉の土器が希薄である地域は、第Ⅳ様式が継続していたとみるべきで、「第Ⅴ様式土器」化には一定の期間を要したことを示すのであろう。「第Ⅴ様式土器」圏拡大の内実とは、主導勢力による拠点集落の解体と、集住していた人々を分散居住させる集落再編をともなう畿内圏の統合であろう。また、それぞれの地域で高地性集落が一時的に現れることから、それは武力的圧力をかけての覇権行為であったとみる。またそうでなければ、約500年存続した拠点集落を放棄させる強制力を説明できない。

こうして近畿地域がほぼ「第Ⅴ様式土器」圏となる。令制下の畿内につながる地域圏の原型は、1世紀の「第Ⅴ様式土器」圏にさかのぼるのであろう（図2）。

(2) 広域地域圏の形成される弥生時代後期

弥生時代後期の畿内社会は、河川ごとに拠点集落が分布し、それらが並立する中期までの弥生社会を大きく変化させ、それまでにない広域の地域圏を生み出している。こうした地域圏の形成は、畿内における独自の動きではない。弥生時代後期には、北陸や東海までの西日本の諸地域で、同じように広域地域圏の形成が進む。畿内圏の形成も、こうした西日本で共通する変革であり、弥生後期社会の本質は西日本における広域の地域圏形成にある。

弥生時代後期に成立する地域圏は、炊飯具である甕に示される土器様式の分布圏に見ることができる(図3)。こうした地域ごとの土器分布圏の形成過程について、赤塚次郎は後期に特有の長脚有段高杯の共鳴的出現(丹後・北陸、吉備、そして湖南を挙げる)と広域化を指摘し、その影響により九州から東海にかけて広域にわたる南海型が生まれ、各地で土器様式の劇的な変化をもたらしたとする。後期ははじめに西日本規模の大きなインパクトがあり、各地域において土器様式の転換をもたらし、似通った器形の広がりなど、地域をまたがる影響の強い前葉を経て、中葉以降、それぞれ独自化が進行し、特色ある土器様式圏が形成されていくという[赤塚2002]。

それぞれの地域の社会的変化は、土器を含め総合的に論じられる必要があるが、後期後葉にかけて個性的な土器様式圏がでさうことに、畿内で見たとような地域的統合の進行を考えてよいだろう。地域圏の形成は、特有の墳墓や青銅器の分布からも確認することができる。



図3 弥生時代後期の地域圏

(3) ヤマト国の成立と形成

上記のように、1世紀の変革は西日本規模のものであり、畿内における集落再編に見られる畿内圏の形成は、畿内独自の動きではなく、西日本諸地域の動向と連動する。そのなかで大和川で結ばれる中河内・大和南部の勢力が畿内圏形成に動いたものと考えられる。中河内と大和南部は、土器の上でも主体的な変革を進める地域であり、いち早く石製武器を発達させ、それ以前から既に一定の優位性をもっていた。先の年代観からすると、およそ1世紀前半を中心として「第V様式土器」圏の形成が進み、1世紀後半には畿内圏がほぼできあがっているであろう。

この「第Ⅴ様式土器」⁽⁶⁾圏として把握される畿内圏が、のちに〈魏志倭人伝〉に「邪馬台国」と表記されるヤマト国であろう。ヤマト国の名前は〈魏志倭人伝〉に現れるが、これは倭国王が共立された3世紀はじめに出現したわけではない。以下、畿内圏でなく「ヤマト国」とする。

ヤマト国形成の背景には、中期前半以来の武器の発達にうかがえるように、畿内における農耕社会の進展にともなう地域内の抗争が既に進んでいたこと、それに加えて鉄器化の進行が大きく作用したと考えている〔都出編 1998〕。鉄素材は朝鮮半島南部に依存することから、その安定した確保のためには、他地域との関係構築が不可欠である。水系ごとに拠点集落が並立する社会で対応することは不可能であり、より強力な主体を作り上げ、他地域とわたりあっていかなければならなかったと思われる。鉄器化が地域圏の形成を促した蓋然性は高いとみる。

③…………ヤマト国の評価

弥生時代後期のヤマト国の評価は高くない。これまでの鉄器出土量は多くなく、吉備・出雲・丹後のような大型墳丘墓はないとされる。しかし、ヤマト国を主導する中河内・大和南部は広い平野部を擁し、生活拠点も墳墓も低地部にあり、遺跡の実態は、まだ限定的にしか明らかになっていない。拠点の遺跡の内実、鉄器や首長墓の様相はまだ解明されているわけではない。

以下、弥生中期までの近畿地方、弥生後期のヤマト国について、個々の要素から考えてみたい。

(1) 畿内の潜在的生産性

新納泉は地形の傾斜にもとづき農業生産力を算出している〔新納 2001〕。これに10世紀初頭の『和名類聚抄』による田面積による補正を加えているが、大和・河内・摂津・伊勢・尾張については、地形的な特性以上に田積が大きく、開発の進んだ結果であるとみている。

『和名類聚抄』における旧国別の田面積は、山城国 8961 町、大和国 1 万 7905 町、河内国 1 万 1338 町、和泉国 4569 町、摂津国 1 万 2578 町、計 5 万 5351 町である。筑前国は 1 万 8500 町であり、古代における第一次生産高としては、畿内は筑前の3倍である。ちなみに東海地域は、伊勢 1 万 8130 町、尾張 6820 町、三河 6820 町、美濃 1 万 4823 町、計 4 万 6593 町、吉備は、備前 1 万 3185 町、備中 1 万 0227 町、備後 9301 町、計 3 万 2713 町である。

むしろ、弥生後期の1・2世紀段階での比較は難しい。3世紀以降の古墳時代において、畿内は倭王権本拠地として開発が促進されたであろう。8世紀までの600年間に投入された労働力は相当なものであろう。ただし、7世紀以降の官主導の開発は、地域的偏差はあまりないと思う。一方、弥生時代後期の生産力を考える上では、本格的な水田稲作の開始時期の差、それによる紀元前後までの開発の進展の差をむしろ考慮しなければならない。筑前では、早くに平野部の開発が飽和し、集落が丘陵に上がることが指摘されている。開発の早い地域においては、当時の技術力による可耕地の開発は頭打ちになっていた可能性がある。

北部九州の開発が大きく先行したこと、近畿地方は後発ながら倭国成立後には他地域より大きく開発が進行したと思われ、単純に比較することはできないが、ここでは、『和名類聚抄』の田面積をひとつの参考にして、1・2世紀の段階の畿内の開発率が筑前に対して1/2としても、畿内五国

でナ国やイト国のある筑前を超え、1/3で同等であることを確認できればよい。

1・2世紀を考えた場合、ヤマト国は旧国の五国の統合へと進んだのに対して、筑前ではナ国とイト国は別であり、また筑後や肥前では、吉野ヶ里遺跡が弥生時代後期まで存続するように、河川ごとの拠点集落が並立するあり方が継続している。つまり、北部九州では中期までの枠組みが基本的に継承され、より広域の地域的統合に進まなかったのに対して、それ以東の西日本社会は、より広域の地域圏の形成を急速に進めたのである。

畿内は、東海地域とならんで列島において平野面積が大きい地域であり、ここでは潜在的な生産力が高かったことが確認できればよい。基礎となる農業生産力からすれば、畿内がひとつにまとまることで、列島の中で最有力となる潜在的な実力を有していたとみる。

(2) 青銅器生産

ナ国の須玖坂本遺跡などから膨大な青銅器の鋳型が出土している。もうひとつの青銅器生産の中心が畿内である。唐古・鍵遺跡、東奈良遺跡、亀井遺跡、鬼虎川遺跡、鶏冠井遺跡など、青銅器の鋳型が各地の拠点集落から出土し、ガラス製品も作られていた。

青銅器の生産は、弥生社会のなかでの一定の優位性を示すだろう。瀬戸内や山陰でも青銅器が生産されていたが、全体としての青銅器の出土量や、鋳型や工房の検出例から、畿内は東方の青銅器生産の中心地であった。高度な青銅器鋳造を担う専門職人は、銅鐸の流派から畿内各地を拠点として活動しており、彼らをかかえ生産にあたらせる力量があったと認めてよい〔和田1986〕。

中期までの「聞く銅鐸」は近畿地方のみならず広く流布していた。後述する弥生時代後期のナ国の銅矛やヤマト国の「見る銅鐸」のような性格ではなく、あくまでも共同体祭器であり、そうした需要に応えるものである。したがって「聞く銅鐸」の分布から畿内の過度な優位を説くことは誤りである。しかし、近畿地方が青銅器職人をかかえる優位性を一定有していたことは認めるべきであり、また周辺地域が銅鐸を手に入れるためには、製品の授受あるいは職人の招聘が必要で、銅鐸の需要と供給という点では、近畿地方への依存があったとすることも誤りではあるまい。

(3) 武器の発達

近畿地方では、前期末には石鏃の大型化が始まり、中期にはいと凸基式・有茎式を発達させ、地域内抗争が始まっている。吉備や讃岐、東海地域でも、やがて中期後葉になると石鏃の大型化が顕在化する。松木武彦によれば、大きな平野部を有する地域で、農耕社会の定着とともに地域内部での抗争が始まるが、早期末に抗争の始まる北部九州には遅れるものの、北部九州より以東の地域のなかで、近畿地方ではこれに次いで中期前半に抗争が始まっているという。東部瀬戸内や東海地域で抗争が始まる中期後葉には、さらに抗争を激化させているであろう。また、中期における武器の発達は近畿南部地域で顕著であることも明らかにされている〔松木1989〕。

以前から説かれてきた農業生産力および青銅器生産にもとづく畿内の優位性、これを否定する見方もあるが〔北條2000a〕、客観的な比較は困難で優位性の程度は問題であるにしても、棄却する根拠はなく、加えて松木武彦が論じた地域内抗争の開始の早さは、やはり農耕に適した平野を有し、開発の進展が進んでいたことがもたらした結果と考えられる。

(4)「見る銅鐸」

ここまでは弥生時代中期までの要素3点を、前提として取り上げたが、ここからは弥生時代後期の現象について、いくつかの材料を取り上げて考えてみたい。

まず、装いを新たにした新段階の突線鈕式銅鐸である。おおむね中期までにおさまる扁平鈕式銅鐸から、後期にはいると突線鈕式銅鐸（1式～5式）へと変化する。突線鈕1式銅鐸の段階に、扁平鈕式最末期の10グループほどが5グループほどに統合され、次の2式段階に、そのなかの近畿中心部と推測される大福型グループを核として近畿式銅鐸が成立する[難波2008]。鉛同位体比から、その青銅素材は均質であり、同一箇所生産されたことが想定されており、中期までの複数の職人集団によるものでなく、畿内中心部の特定工房で生産されたと推測される[福永1998]。そして、播磨・但馬・丹後・若狭などの地域、東は近江から三河におよぶ東海地域、南は紀伊や阿波・土佐に運ばれている。これは周辺諸地域との交渉を示し、ヤマト国の働きかけを読み取ることができるだろう[福永1998]。北部九州の銅矛と同様に広域に広がり、青銅器にうかがえる他地域への働きかけの点で、量的にも分布の広さからもヤマト国は北部九州勢力と拮抗する。

近畿Ⅰ式（突線鈕2式）・Ⅱ式（突線鈕3式）・Ⅲ式（突線鈕4式）・Ⅳ式（突線鈕5式）と推移し、突線鈕2式の段階で近畿式が、また突線鈕3式の段階で三遠式が成立するが（三遠式はほぼこの段階におさまる）、両者が広域に分布する。突線鈕3式が弥生時代後期中葉にあたるとすれば、土器の地域色が発現していくなど地域圏が明確になる時期にあたる。また、近畿式銅鐸の分布は、突線鈕4式以降、東部瀬戸内では縮小するが、丹後・但馬や紀伊では維持され、東方では、三河や遠江西部への働きかけは継続し、突線鈕5式段階には尾張・美濃におよぶ（図4）。

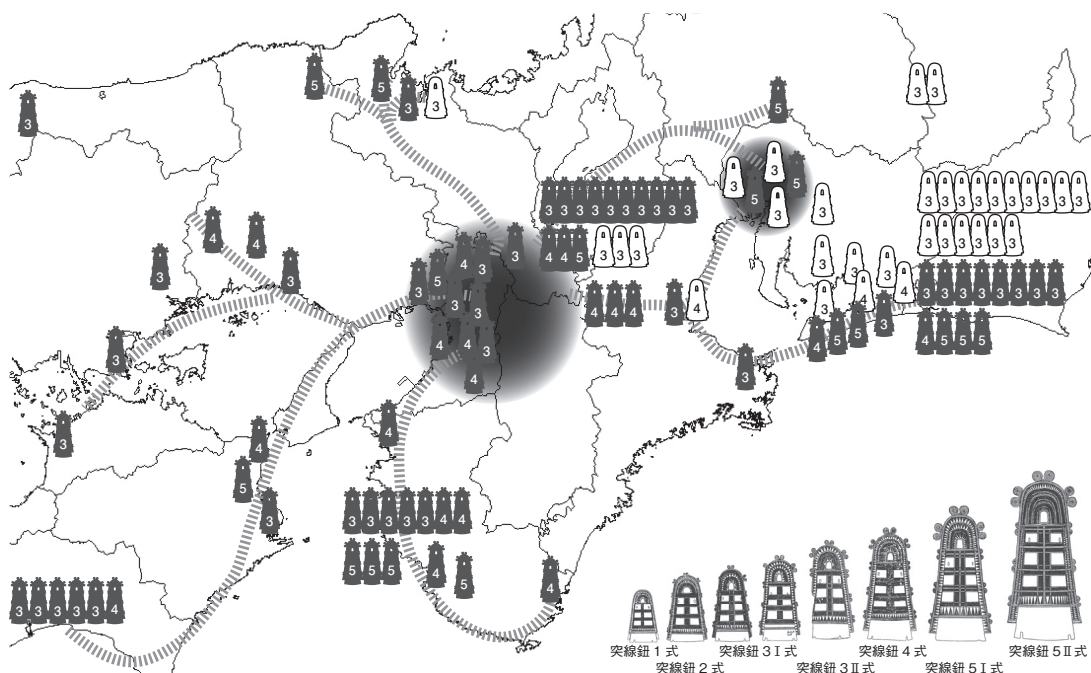


図4 「見る銅鐸」にうかがえるヤマト国の働きかけ

吉備や出雲において青銅器の廃棄と王墓の発達に関連づけられている〔岩永1998〕。古い共同体祭器を捨て去ることは、首長と一般成員が同居する体制から、首長層が権力を強め独立する段階へ進んだことを示し、それ以降の王墓の発達とを整合的に理解することができる。

岩永省三は、こうした吉備や出雲に対し、銅鐸の鑄造を続けることについて、王墓の発達が顕著でないこととともに、ヤマト国の後進性とみる。しかし、青銅器の生産を継続することが後進的であろうか。後期の銅鐸はもはや共同体の祭器でなく、ヤマト国のシンボルとして、ヤマト国内部のみならず、周辺地域との交渉の場で用いられたと考えられる〔福永1989〕。むろん、青銅器は交渉に際しての贈答品ではあっても、安全保障や交易関係などの交渉内容が重要なのであろう。しかし、そこにヤマト国を表徴する、それまでにない大型の銅鐸を持ち込むことの意味は低くはなかったと思う。「見る銅鐸」はかつての拠点集落における祭器ではもはやない。得意とする青銅器生産技術を用い、ヤマト国のシンボルとして鑄造し、それを他集団との交渉に用いたのである。

吉備や出雲における青銅器の廃棄と王墓の発達に関連させて理解する見方は魅力的であり、その蓋然性は高いだろう。しかしヤマト国においても、拠点集落で打ち鳴らされた「聞く銅鐸」は、集落の廃絶とともに埋納され、吉備や出雲と同様に姿を消したのである。捨て去った「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への変化が、飛躍的な大型化として明瞭に画されるものでないにせよ〔岩永1997〕、変質があったことは銅鐸そのものから明らかであり、なによりも弥生時代中期までと、後期という、それぞれの社会的実態のなかに置いて考えるべきであろう。中期までの弥生社会に対し、弥生時代後期の社会が広域の地域圏を形成する時代であり、相互に関係を構築しつつ、また競合関係にもあった、そうした時代のなかで大型化を遂げていく「見る銅鐸」を意味づける必要がある。

青銅器工人の技術の粋を集めて作り上げた「見る銅鐸」、ヤマト国の表徴としての意味が新たに込められ、それを周辺地域との交渉に用いることが、後進性を示すと考える必要はない。

(5) 鉄器化の進行

近畿地方において鉄器化が始まるのは紀元前1世紀のことである。三田市奈カリ与遺跡では、鉄鏃・板状鉄斧・ヤリガンナ・刀子など10点を超える鉄器が出土している。現状では、後期に入って飛躍的に増加するわけではないが、石器の激減や鉄器研磨用を含むであろう砥石の増加から、鉄器化の進行が推測される。後期前半にはなお石器が残存するが、後期後半になると、転用と思われる石器はあるものの基本的には石器は消滅し、ほぼ鉄器化が達成されたと考えられる〔榎垣田1999〕。生産された鉄器は、後期前半までは打ちのぼした板を鑿で切り取ったものが多いが、後半になると、板状斧に対し袋斧が量的にも増え、鑿でも袋状のもの、茎が方柱状で長い刀子など、板状品よりも高度な加工技術を要する厚みのある製品が出現している。

確かに鉄器出土量は多くはなく、全国で同じように発掘調査が進むなかで、現状の量による畿内の鉄器化進行に対する疑念もある〔村上1998〕。しかしこれは遺跡の状況と発掘調査の状況が大きく左右している。近畿地方における弥生後期の集落は、河内や大和をはじめ特定の拠点的な遺跡のほかは、小規模分散化している。後期の集落の多くを占める小規模集落は、把握されても鉄器が見つかることはあまりないだろう。そして、中河内や奈良南部の拠点的な遺跡については、河内平野では遺構面が深く大規模開発でなければ調査がおよばず、奈良盆地の場合は調査の契機となる開発

事業がこれまで少なく、いずれにしても十分明らかになっていないのである。

一方で、宅地造成などで面的に調査が実施される丘陵地では、古曽部芝谷遺跡・観音寺山遺跡・田辺天神山遺跡などからは、そう長くはない存続期間ではあるが一定量の鉄器が必ず出土する。

鍛冶炉の発見例は後期後半の枚方市星ヶ丘遺跡1例にとどまり、村上恭通はこれをⅡ類鍛冶炉に分類し、被熱が著しいⅠ・Ⅱ類の鍛冶炉であれば、これまでの調査でもっと確認されていてよいはずだが、1例にとどまることから、技術水準の低いⅢ・Ⅳ類鍛冶炉が中心であろうという[村上1998]。しかし上記と同様、ほとんど見つかっていないとみるべきで、比較的小規模と思われる星ヶ丘遺跡において、Ⅱ類鍛冶炉が確認され鉄器加工が行われている事実はむしろ重要である。畿内の中核部である河内や大和南部では、より大規模な鉄器加工が行われていたことが推測される。

(6) 中国鏡の入手

紀元前1世紀に中国鏡を入手し得たのはほぼ北部九州のみであったが(漢鏡3期)、1世紀前半には漢鏡4期の鏡が東方へおよぶようになり、1世紀後半から2世紀前葉頃には、漢鏡5期の鏡が数多く東方へ広がる(図5)。なお、完形鏡を副葬する北部九州に対し、東九州を含めた以東の地域では、墳墓に埋納するこ

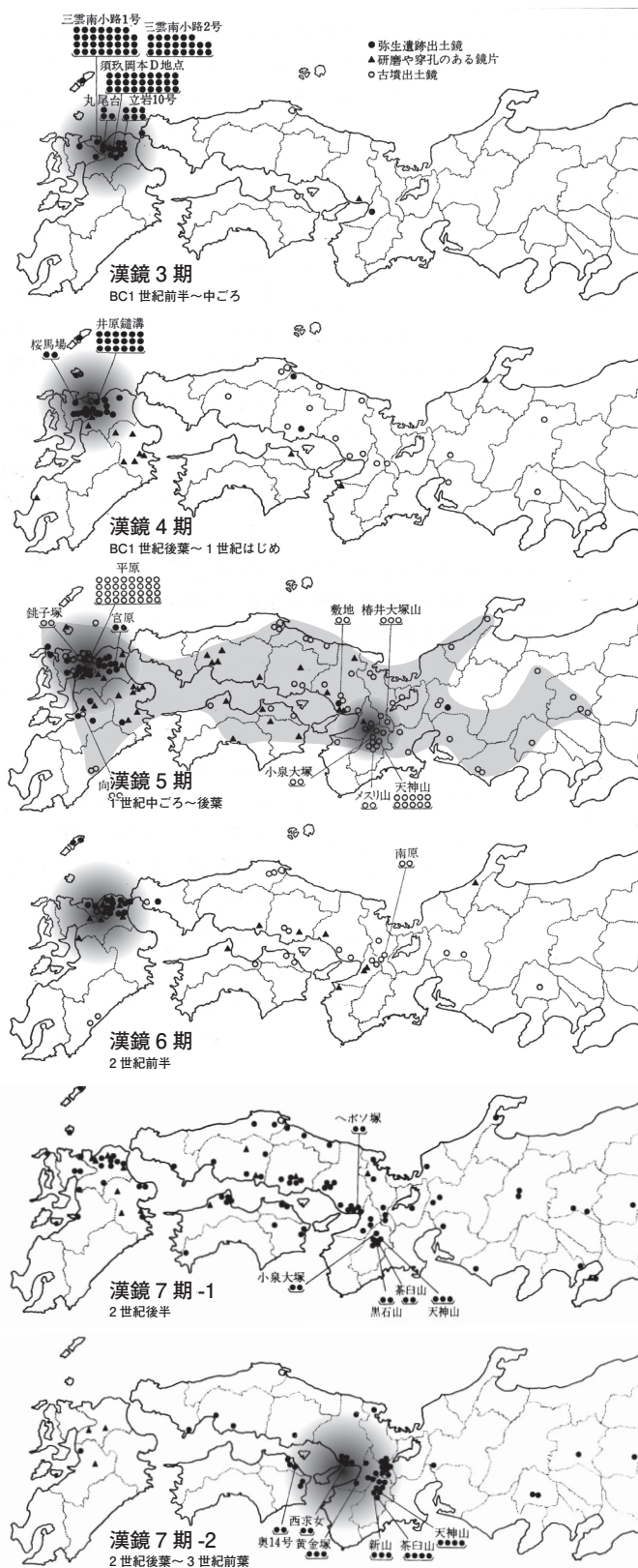


図5 中国鏡の東方への広がり[岡村1986:1999]による

となく伝世される。弥生時代後期に入ると、鏡への志向は広範に広がり、朝鮮半島で出現した小型倣製鏡が倭でも生産されるようになり、また完形鏡を割って分割保有する破鏡も現れてくる〔岡村 1986〕。

北部九州以外の後漢鏡のほとんどは古墳から出土するもので、弥生時代後期に入手し、古墳に副葬されるまでの伝世が考えられてきたが、伝世鏡に対する否定論は根強い。しかし、完形の後漢鏡の手擦れは、弥生時代における分割使用と考えられる破鏡と共通しており、ともに長期使用による摩滅とみている。鶴尾神社 4 号墳の方格規矩鏡のように、割れたものを穿孔し紐で緊縛して用いていることも、長期間にわたり大切に扱われてきたことを示す。

弥生時代後期には、貨泉や芦屋市会下山遺跡出土の三翼鏃など、確実に中国製の器物がヤマト国に波及しており、鏡がもたらされていた蓋然性を認めるべきである。いわゆる手擦れについては、倭における長期使用を支持すると考えている。

漢鏡 5 期の鏡の波及時期は 1 世紀後半から 2 世紀にかけての時期であり、ヤマト国をはじめ、西日本で地域圏が出そろってくる時期である。破鏡や小型倣製鏡からうかがえるように鏡入手の要求は高く、それぞれの地域勢力が中国製の器物を求めていることがうかがえよう。

伝世鏡を認める立場からすると、漢鏡 5 期の後漢鏡は、引き続き北部九州に集中するものの、東方へもかなり波及し、とくに近畿地方では数多く、1 世紀後半から 2 世紀にかけて、ヤマト国が東方社会の中でひとつの求心核をなしつつあったとみることができる〔岡村 1986〕。

(7) 小括

以上の通り、1・2 世紀のヤマト国について、出土鉄器量の寡少さ、大型墳丘墓の不在から低くみられることが多いが、この 2 点のみならず総合的に評価する必要がある。

ヤマト国は、広い平野面積をもち潜在的な生産力は高く、青銅器職人のかかえ、農耕社会の定着にともなう地域内の抗争も中期前半には始まっている。いくつもの地域からなる近畿地方は、1 世紀に一定の統合をなしとげヤマト国を形成する。ヤマト国の形成が拠点集落を解体するものであること、日常土器を「第 V 様式土器」に転換させるものであることから、大きな強制力が働いていたと考えられ、これを主導した勢力の強い意志および武力を含む実力が推測できる。中期までの近畿地方は、武器の発達が進んでいた南部地域が既に優位であったが、全体としては拠点集落の並立状態にあった。それが紀元後の西日本情勢のなかで広域地域圏を形成することで、相当な権力の集中を実現させたヤマト国として顕在化したと考えることができる。

弥生時代後期に形成されたヤマト国は、いわゆる「見る銅鐸」の分布から周辺地域に活発に働きかけていることがうかがえ、伝世鏡を認めるならば、中国製の器物も数多く入手していたことになる。鉄器については、実物資料の少なさには理由があり、一方で石器の激減と消滅から鉄器化は確実に進行していた。ヤマト国における鉄需要はかなりの量であったと考えられ、素材を確保するために他地域とわたりあい、また製品加工および供給をコントロールすることは、主導勢力の権力の源泉となったであろう。ヤマト国という枠組みを実現させた主導勢力の存在をまず評価すべきであり、またできあがった広域の地域圏を維持していくことが、その権力をさらに強固にする。ヤマト国は、近畿地方諸地域の連合体であろうが、中河内・大和南部の主導勢力は、急速に大きな権力を

保持するようになったと推測する。ヤマト国王が当然生まれていたであろう。

ヤマト国の内実の解明は大きな課題であり、河内平野や奈良盆地の遺跡調査の進展によって徐々に明らかになるであろう⁽⁶⁾。しかし、まったく不明ななかで願望を論じたわけではない。実体不明な点は多いが、しかしこれまでに明らかになっている考古学的成果を総合的に考えた結果である。鉄器の少なさや王墓の不在をもって、簡単に結論を下す論調には同意しがたい。

④…………ヤマト国本拠としての纏向遺跡の形成

冒頭で¹⁴C年代を整理したように、畿内のいわゆる庄内式土器の出現が2世紀にさかのぼることは確実である。これまでは、庄内式の開始期すなわち纏向遺跡の形成は、2世紀末ないし3世紀はじめの倭国成立に対応すると考えられてきたところであるが、新しい年代観によれば、纏向遺跡の出現は200年前後の倭国成立より大きくさかのぼる。

庄内式土器の年代観の確立にはなおデータの蓄積が必要であるが、庄内0式（纏向1式＝大和Ⅵ4式）を2世紀第2四半期頃、庄内1式を2世紀後半の前半期に、庄内2式を2世紀後半の後半期にあたと考えた。以下、この年代観にもとづき検討を加える。

(1) 纏向遺跡出現の意味

大和Ⅳ3式期には、奈良盆地の拠点集落は、多量の土器が廃棄され環濠が埋められる〔榎考研2005〕。古墳時代にも居住は続いており、遺跡としては存続しているわけだが、環濠の埋め立ては重要であり、弥生時代集落としては廃絶したと考えるべきであろう。そして庄内0式（纏向1式＝大和Ⅵ4式）には、幅5m前後の矢板で護岸した纏向大溝が計画的に掘削され、纏向遺跡の形成が始まる。¹⁴C年代から2世紀第2四半期頃と考えられる。同時に河内においても、加美・久宝寺遺跡群や中田遺跡群が形成される〔山田1994〕。ヤマト国の主導勢力である大和川で結ばれる中河内・大和南部において、弥生時代集落が廃絶し、新たな拠点的遺跡の形成が始まる大きな転換点となるが、それはおよそ2世紀前半のなかで生じたと考えられるのである。

纏向遺跡の形成開始が2世紀第2四半期にさかのぼるとすれば、それは倭国王共立よりも50年以上前のことであり、倭国成立と結びつけて考えることは誤りとなる。纏向遺跡の形成は、畿内圏を形成した「ヤマト国の自律的な本拠形成」とみなしうる。

寺澤薫は、大和の弥生時代の拠点集落が環濠を埋め廃絶し、纏向遺跡が現れてくることを非連続として理解し、これを倭王権の成立にともなう王都とみなした上で、外部勢力の征服を想定し〔寺澤1979〕、のち、征服ではないが吉備と北部九州を中心とする諸勢力の合意にもとづく建設と考えを改めた〔寺澤1984〕。近年では、倭国は、筑紫を中心とする北部九州勢力と吉備・播磨・讃岐の東部瀬戸内勢力によって樹立されたもので、イニシアティブは吉備が握っていたと、さらに明確に見解をのべる〔寺澤2000〕。しかし、これは纏向遺跡から導かれたものではなく、纏向遺跡周辺に造営されていく墳墓から導いた、王権形成主体に関する見方によるものである。

寺澤は倭王権の成立を卑弥呼共立に求め、それを庄内式の成立＝纏向遺跡の形成にあて、2世紀末ないし3世紀初頭とし、箸墓古墳の築造された布留0式を3世紀後半に置き、庄内式を3世紀前

半から中葉とする年代観に立つ。しかし、纏向遺跡の成立はより古い。

纏向遺跡の形成は、1世紀に畿内圏を統合し権力の集中を実現させたヤマト国によるものと考えられる。纏向遺跡の形成される2世紀前半は、およそ弥生時代後期後葉に相当すると考えているが、この時期は、西日本で形成された地域圏が土器の地域色を強める時代である。倭国乱後のような連合関係に至る以前の段階であり、纏向遺跡の形成主体は畿内ヤマト国であって、西日本諸地域が地域圏を強化していくこの時期に、本拠を新たに造営したものと考えられる。

(2) 2世紀後半のヤマト国の求心性

庄内0式段階から、纏向遺跡には外来土器が早くも現れており、ヤマト国本拠に、東海・吉備・北陸・山陰・西部瀬戸内・近江からの人々が集まっている。これは2世紀後半の庄内1式・2式（纏向2式）段階になると量が増え、東海地域が多くなり、吉備は少なくなり、新たに播磨・紀伊・関東の土器が現れる〔榎考研1976〕。土器の地域色が強まる時代であるが、しかしそれは閉鎖的な関係でなく、纏向遺跡は既に2世紀のうちに広範な地域の人々が集まる求心力を備えている。東日本・西日本および山陰地域におよぶことから、列島規模の関係が生まれている。

岡村秀典は、2世紀前半の漢鏡6期に後続する漢鏡7期（2世紀後半～3世紀前葉）の鏡について検討している。上方作系獣帯鏡などの第1段階の鏡（2世紀後半）は、漢鏡6期鏡の分布域縮小から転じ、北部九州から瀬戸内、近畿から東日本に至るまで広範に分布する。続く第2段階の画文帯神獣鏡（2世紀後葉から3世紀前葉）になると、明確に畿内から東部瀬戸内に分布の集中域をもつ（図5）。北部九州を飛び越えての画文帯神獣鏡の分布に、楽浪郡を押さえた公孫氏政権との外交関係にもとづくヤマト国の直接入手に転じているとみて、倭王権の成立を読み取る〔岡村1999〕。

しかし、第1段階の鏡は多様であるが、例えば上方作系獣帯鏡でも径の大きい六像式は、瀬戸内で結ばれる地域にまとまり、径の小さい四像式の分布域はより広い〔岸本2011〕。画像鏡の分布も六像式と同様ではないかと思われる。つまり2世紀後半の漢鏡第1段階の鏡についても、全体の分布図では不明瞭ながら、比較的大型の優品は画文帯神獣鏡と同じような分布傾向にあるのである。福永伸哉が想定するように、鏡種・径による格差付けをもつ分配行為が考えられる〔福永2000〕。前稿では、分布傾向を指摘したものの、近畿地方の勢力が倭国成立以前に楽浪郡から中国鏡を輸入していたとは考えにくいという状況判断により、2世紀後半の漢鏡7期第1段階の鏡も、倭王権成立後の3世紀以降に輸入されたとみなした〔岸本2011〕。

しかし、この問題は2世紀後半のヤマト国を考える上で無視できない。漢鏡7期の鏡は、鏡の分布の中心が、北部九州から畿内へ移動する転換点にあたるが、2世紀後半の漢鏡7期第1段階の鏡について輸入時期を下げなければならない積極的な理由があるわけでない。纏向遺跡を形成した2世紀後半のヤマト国が、既に楽浪郡との外交関係を有し、鏡を入手していたのではないか。

纏向遺跡の建設が2世紀第2四半期にさかのぼり、庄内式の年代が遡上することにより、各地から纏向遺跡に多くの人々が集まる関係は倭国成立前にさかのぼることになるが、そこに漢鏡7期第1段階の鏡を置いてやることは十分可能である。3世紀前半の倭国成立後と考えてきたヤマト国の優位性の多くは、倭国乱以前にさかのぼるとみなしなければならない。

(3) 倭国王帥升とは

以上のように考えると、『後漢書』にある107年の倭国王帥升らによる朝貢が注目される。初めて「倭国」王の名称が現れ、57年の奴国の朝貢段階とは異なり、この間に中国側が倭国と表現するものへの変化があったと考えられる〔仁藤2004〕。ヤマト国がほぼのちの畿内の範囲にまで拡大するのが1世紀中葉で、伝世鏡を認めるならば、1世紀後半から2世紀にかけて多くの中国鏡がヤマト国にもたらされている（図5）。その量は北部九州に肩をならべるものとなっており、ちょうど107年の倭国王帥升の朝貢時期と重なる〔岡村1986〕。

そして〈魏志倭人伝〉によれば、著名な卑弥呼共立の下りには、もともと男王がおり、70～80年が経過し倭国が乱れるとある。倭国乱が2世紀後葉のこととして、70～80年さかのぼると2世紀はじめとなり、この記述は後漢への倭国王帥升らの朝貢をふまえた記述という〔仁藤2004〕。この帥升について、これをイト国王とする理解がある〔寺澤2000〕。しかし〈魏志倭人伝〉の記述は、倭国王となったヤマト国に居住する卑弥呼共立に至る経緯を書いており、2世紀初頭のイト国と3世紀のヤマト国とを結びつけて説明するのは不自然である。3世紀前半のヤマト国が倭国の盟主となっていることを起点に、その過去を記録しているのであり、もとは男王がおり、70～80年経過して倭国が乱れるという記述が、107年の倭国王帥升を意識したものとするれば、同じ権力基盤に立脚する王位の系譜を語るものと考えられ、第一義的にはヤマト国王としての系譜を示し、さらに倭国王の地位としてもさかのぼることすら示唆している。

そうすると、ヤマト国王が倭国王とされる状態は2世紀はじめにさかのぼることになる。纏向遺跡への外来系土器の出土は庄内0式（纏向1式）期にさかのぼり、2世紀第2四半期とすれば、107年との年代差もあまりない。2世紀初めの頃には、中国鏡の量は北部九州と匹敵するようになっており、ヤマト国の評価をさらに2世紀初頭について考えていく必要がある。

倭国王帥升については、ごく限られた文字記録であるため、ひとまず横に置かざるをえないが、2世紀中頃から後半において既にヤマト国が求心性をもつとなると、当然のことながら、そうした実態がどこまでさかのぼるのかを考える必要がある。

⑤……………纏向型前方後円墳論

(1) 纏向諸墳はヤマト国王墓

2世紀第2四半期頃に建設の始まる纏向遺跡の中心部に、墳丘長約100mのいわゆる「纏向型前方後円墳」が築造される。橋本輝彦の整理によれば、纏向石塚古墳が庄内1式、勝山古墳が庄内2式、矢塚古墳が庄内3式、ホケノ山古墳と東田大塚古墳が布留0式という⁽⁷⁾〔橋本2006〕。それぞれ¹⁴C年代に照らせば、纏向石塚古墳が2世紀第3四半期、勝山古墳が2世紀第4四半期、矢塚古墳が3世紀前葉、ホケノ山古墳と東田大塚古墳が3世紀中葉となる。纏向石塚古墳については、とくに庄内1式初頭としており、そうすると2世紀中頃となる。

纏向遺跡が、ヤマト国の本拠を建設したものとすれば、その中心部に築造されるこれらの古墳は、

ヤマト国王墓と考えることができる。いまわかっていない5基について、2世紀中頃から3世紀中頃までの約100年間に5基であり、歴代の王墓と考えておかしくない。ただし、纏向地域のなかに、箸墓古墳よりさかのぼる前方後円墳が、これら5基以外にあるのかどうか、時期不詳のものも多いため判断は難しいが、さらに増加することも予測しておかなければならない。

これらは、庄内式を3世紀前半を中心とする時期と考えてきた段階では、3世紀初頭の倭王権形成後のものとみられてきたが、矢塚古墳以降についてはそうなるが、纏向石塚古墳と勝山古墳は、倭王権成立以前のヤマト国王墓に相当することになる。

(2) 3世紀前半における前方後円墳の共有

纏向型前方後円墳を提唱した寺澤薫は、これら纏向地域の大型前方後円墳と類似したものが、瀬戸内で結ばれる地域を中心に点々と存在し、箸墓型前方後円墳以前の段階で墳丘の共有が始まっていることを明らかにしている〔寺澤1988〕。

従来は、こうして瀬戸内で結ばれる地域に現れる纏向型前方後円墳について、確実に箸墓古墳以前にさかのぼるものがあるのかどうか議論となっていたが、現時点においては、萩原1号墳や黒田古墳など確実なものはまだ少ないが、おそらく確かであろう。各地の纏向型前方後円墳について、引き続き時期を可能な限り詰める必要があり、墳形の検討も不可欠である。いずれにしても、箸墓古墳以前の3世紀前半に、纏向に築造された前方後円墳をモデルにした纏向型前方後円墳が存在し、前方後円墳の共有が始まっていることは寺澤の卓見の通りであろう。纏向型前方後円墳が東部瀬戸内で多元的に出現するとの見方もあるが〔北條2000b〕、纏向諸墳とそれに類似する纏向型前方後円墳は、規模の差に加え、最古の石塚古墳および勝山古墳が2世紀後半にさかのぼる以上、基本的にヤマト国の前方後円墳という墓制の影響下に出現すると考えられる（図6）。前方部の形態や墳丘の仕上げに差はあっても、ヤマト国王墓である前方後円墳との墳形の共有を意味する。

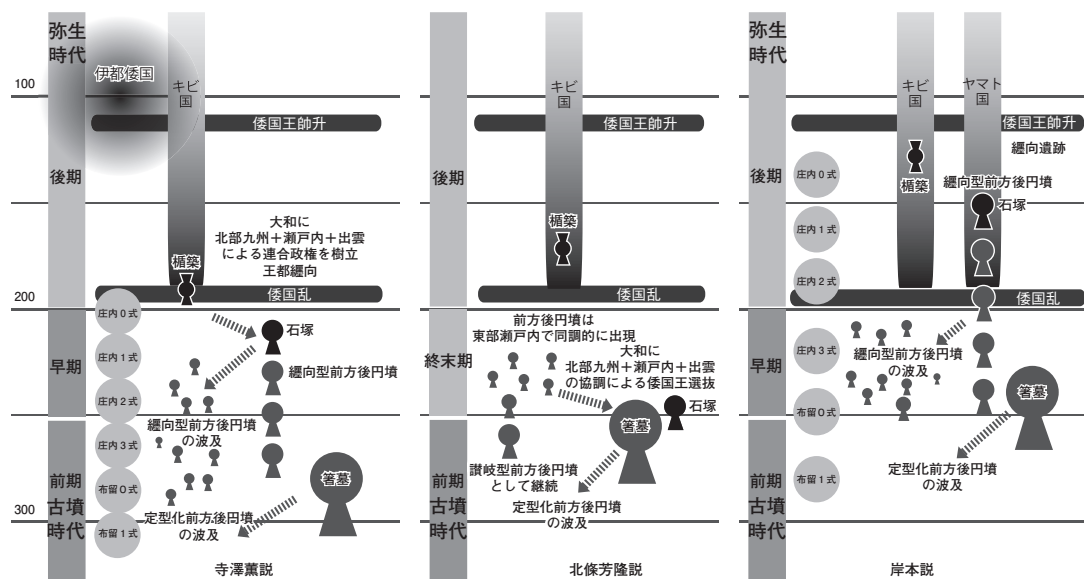


図6 楯築墓と纏向諸墳および纏向型前方後円墳の関係

今後は、前方後円墳の共有が始まる時期の見極めが課題となる。現時点では、倭国成立後の3世紀前葉に相当する庄内3式以降になると予想されるが、具体的な検討が必要である。

以上のように、瀬戸内で結ばれる地域に前方後円墳といえる形状のもの、あるいはそれに通じるものが、箸墓古墳以前に出現していることの解釈として、東部瀬戸内の円形墓の伝統のなかから独自に産まれる可能性よりも、ヤマト国に起源をもつと考える方が合理的である。したがって、前方後円墳の起源を追求する今日的な課題は、3世紀前半期のものではなく、2世紀にさかのぼる初現資料、具体的には纏向石塚古墳の成立に絞られる。

(3) 前方後円墳を生みだしたのはどこか

弥生時代の墓制の基調は方形墓であるが、そのなかで円形墓を造営したのは讃岐であり前期にさかのぼる。これが備前にもおよび、中期前半には播磨や淡路に、中期後半には但馬・丹波・摂津へ波及する。後期には伊予にもおよび、庄内式期には、さらに東方へ波及し、和泉・河内・大和・近江に拡大するという〔岸本道昭 2006〕。讃岐および播磨が円形墓の故地といえる。

円形墓において周溝の一部を掘り残したものは中期にも認められるが、それが突出部状となったものは後期に現れてくる。讃岐の林・坊城1号・2号墓や尾崎西墓、播磨の有年・原田中1号墓が著名である〔岸本一宏 2009〕。とくに有年・原田中1号墓は、掘り残した陸橋部の反対側に突出部をそなえ、墳丘径も20mを超え、また貼石をもつ。しかし、いずれも規模は小さく、その後、より墳丘を大型化する過程を追うことはできない。前方後円墳の祖形となりうる円丘墓を展開させたのは讃岐や播磨であるが、それを前方後円墳として整えたのはこの地域とはいえない。

そして、両突出部をあわせて約80m規模に達する備中の楯築墓が出現する。しかし、主丘部を円形とする伝統は吉備にはなく、ほかに立坂墓がある程度である。また楯築墓に後続する鯉喰神社墓は方形墓に戻る。弥生時代最大の楯築墓であるが、円丘墓であることも突出部を二つ取り付けることも吉備のなかで成立過程が追えるわけではなく、その後の展開も認められない。

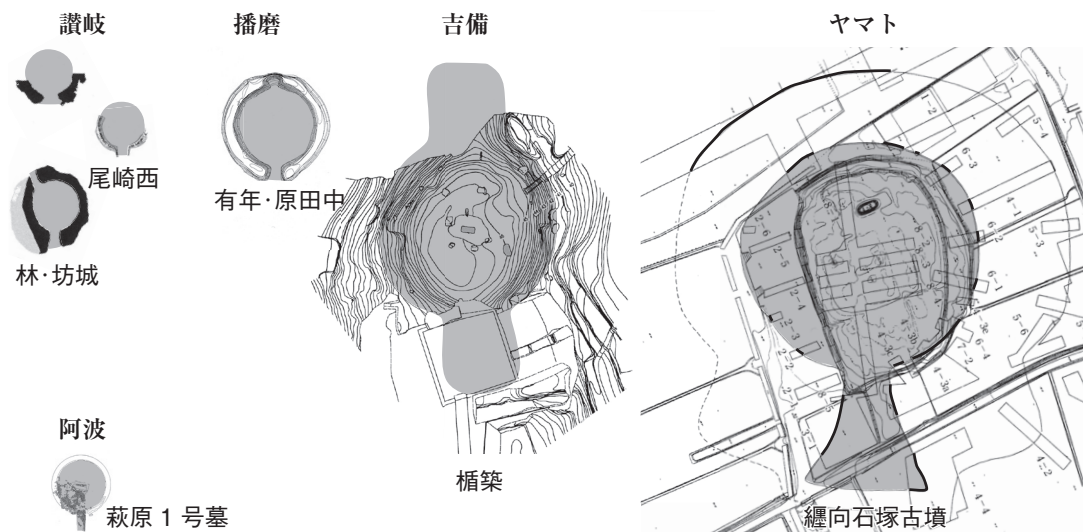


図7 墓道をもつ円丘墓と楯築墓・纏向石塚古墳 1/2000

以上のように、大型前方後円墳に至る連続的な発展をたどることができる地域はない。楯築墓については、吉備においてかつてない大型墳を築造する際に、讃岐や播磨における突出部をもつ円丘墓をモデルとして創出したとみるほかない。瀬戸内を介しての讃岐との親縁関係、特殊器台形・壺形土器などの吉備における案出、新たな木槨構造など、いくつかの要素を統合し、吉備の王墓として画期的な墳墓を造り上げたのかもしれない。⁽⁸⁾しかし楯築墓は一時的で、大型円丘墓が継続するわけではなく、前方後円墳を産み出したのは吉備とはいえない。

寺澤薫は纏向型前方後円墳の「原型」は楯築墓にあるとの見方を示している〔寺澤2000〕。確かに、墳丘規模からも突出部の発達からも、讃岐や播磨の祖形から大きく飛躍し、纏向型前方後円墳に近づいている。両者の関係をどうみるかは、2世紀中葉のヤマト国と吉備との関係、そしていま課題としている前方後円墳の起源を考える上で、きわめて重要な問題である（図7）。

（4）楯築墓と纏向石塚古墳の時期差

まず前提として、楯築墓と石塚古墳の前後関係を確認しておこう。石塚古墳については、庄内1式初頭とする橋本輝彦の見方からすると、2世紀第3四半期でも中頃に近い時期となる。一方の楯築墓は、上東遺跡の資料による編年案の鬼川市Ⅲ式にあたる。鬼川市Ⅰ～Ⅲ式がおおよそ弥生時代後期に相当するので後期後葉ということになる。

図1に、河内・大和、および吉備・讃岐・阿波との土器編年の対応関係を示した。この表のもとになる¹⁴C年代の計測は基本的に大和の編年にもとづく。河内との対応関係については、森岡秀人・西村歩による表にもとづいたが〔森岡・西村2006〕、作成後、河内庄内甕の出現期である19期を、大和庄内甕の出現する大和の庄内1式にあわせ年代を下げた。吉備・讃岐・阿波相互の関係および畿内との対応関係については、基本的に大久保徹也の見解にしたがった〔大久保2006〕。⁽⁹⁾ただし畿内との対応については、庄内様式期・布留様式形成期・布留様式期という区分であり、本図で基準とした大和の細分された土器編年との対応は正確には不明であるが、庄内様式期を大和の庄内1式から3式に、布留様式形成期を布留0式にあてた。庄内甕は河内と大和の限られた遺跡で出現するものであり、各地における庄内式平行期の確認は、庄内甕の存在がひとつの手がかりとなる。庄内甕が大和で成立するのは庄内1式であり、庄内式の開始期である大和における庄内0式は、各地の後期後葉とされる段階と前後関係にあるのではなく、重なりをもつとみる。

土器の対応関係の調整はかなり困難であり、共伴関係の確認にもとづく従来の交差法とともに、各地での編年序列にもとづく¹⁴Cによる年代観の確立と、それらの突き合わせが望まれる。

さて、高橋護による吉備の弥生後期の土器編年では、庄内式に相当するⅨ期（オの町Ⅰ・Ⅱ）の前について、Ⅶa期～Ⅶd期およびⅧa期～Ⅷd期の8時期に区分し、鬼川市Ⅲ式をⅧc期にあてて〔高橋1980〕。そして、上記した考え方にもとづき、大和の庄内1式以前に吉備の弥生後期土器をあて、8期区分の7番目として案分すると、2世紀前半の中頃となる。

土器に疎い筆者の調整した図1案に異論もあるだろうが、以上の操作により、楯築墓は2世紀前半の中頃に、纏向石塚古墳は2世紀中頃とすると、両者の時間差は1世代程度となる。

（5）纏向石塚古墳の起源

まず、纏向諸墳はヤマト国の本拠が纏向に建設されて以後のものであり、現在のところ所在不明であるが、さらにさかのぼるヤマト国王墓も想定しておく必要がある⁽¹⁰⁾。

畿内においては、紀元前1世紀の拠点集落が並立するなかで、亀井遺跡にともなう加美墓のように、約40mの大型長方形墳が存在する。ほかの拠点集落においても、墳丘墓が営まれていたと考えてよいだろう。しかし、加美墓のような墳丘墓がほとんどわかっていないように、河内平野や奈良盆地では、墳墓は地下に埋没しており把握できていない。また後期に入ると、各地の拠点集落は解体され、大和川流域の集団が主導勢力となるので、彼らの墳墓はさらに特定場所に限定されると予測される。ようやくそれが顕在化するのが2世紀中頃の纏向石塚古墳と考える。そして、以後もヤマト国王墓として前方後円墳の築造が続くことは、広域地域圏ができ大型墳丘墓を発達させる他地域での一般的なプロセスと変わらないのである。

以上を前提に、纏向石塚古墳の出現過程を、楯築墓との関係を含めて検討しなければならないが、2世紀前半までのヤマト国王墓が不明である以上、現時点で確かなことはいえない。

まず一案として、突出部をもつ円丘墓が畿内のなかで展開をとげた蓋然性を考えておく必要がある。讃岐や播磨あるいは吉備で追えないとした過程が、ヤマト国で石塚古墳以前から追うことができる蓋然性である。現時点では、讃岐や播磨で定着をみた円丘墓が東方におよび摂津・河内・和泉に現れてくるのは庄内式期とされ、またあくまで少数例であり、ヤマト国で円丘墓が王墓に採用されたと積極的には言えないが、蓋然性は棄却できない。この場合、楯築墓も畿内墓制の影響のもとに産まれたとの視角もありうることになる。

もう一案としては、一方向に突起をもつ前方後円墳としては、纏向石塚古墳が最古であり、吉備の楯築墓と同様、ヤマト国王墓を、それまでにない大規模で新たな仕様のものとして造り出した蓋然性である。東部瀬戸内地域の先行する円丘墓をモデルに、直接的には楯築墓を参考に、王墓を大型化させる競合のなかで、新仕様の王墓を創出したとの見方である。

これは楯築墓を纏向型前方後円墳の「原型」とする寺澤薫の見方と共通するが、同じではない。寺澤は、纏向型前方後円墳を倭国形成後の3世紀以降と考え、纏向型前方後円墳に結実する諸要素は畿内にほとんどなく、東部瀬戸内や北部九州の墓制に求められ、こうした地域の墓制を統合して新たに創出されたとみる。楯築墓の後継墓とまでは言わないものの、楯築墓が直接的な「原型」であり、形態や規模のみならず首長霊継承儀礼をも引き継いでおり、その継承関係を重視している[寺澤2000]。こうした見方は、倭国の成立について、東部瀬戸内と北部九州勢力によって樹立されたもので、イニシアティブは吉備が握っていたとの寺澤の理解につながっている。

しかし、まず纏向石塚古墳は2世紀にさかのぼるので、倭国形成後の産物として、つまり倭国という瀬戸内で結ばれる連合体ができあがったことにより実現したものとは言えない。したがって、纏向型前方後円墳の出自を考える場合、倭国形成後のものでなく、倭国形成前の石塚古墳や勝山古墳について、楯築墓など、石塚古墳に先行する墳墓との比較から考える必要がある。

(6) 纏向石塚古墳築造における楯築墓との関係

楯築墓と纏向石塚古墳を比べると、時期は近接し、特筆すべき大型円丘墓であり、また突出部ないし前方部をもつことも共通するが、二方向と一方向の違いがある。また石塚古墳の前方部は短く

撥形に開くもので、前方部の形状は異なっている。楯築墓は丘陵上に築造されるが、石塚古墳は平野部に立地し周溝をもつ。「石塚」の名称の由来から、石が用いられていたとみられるが、墳丘を画す列石や墳丘斜面を覆う葺石はないという〔橋本2006〕。特殊器台形土器は楯築墓における立坂型以来、吉備の首長連合の表徴といえるものとなるが、石塚古墳には導入されていない。弧文円板は、吉備・阿波・讃岐地域で図形の展開をたどりうるが〔菅原2006〕、別の考え方もある。石塚古墳の埋葬施設は既になく、副葬品を含めて判明していない。

以上、楯築墓と石塚古墳を比較する材料は限られているが、平地に立地し周溝をもつことはヤマト国の墓制のなかで理解できる。前方後円形の形状は楯築墓のものとも異なり、陸橋を残す円形周溝墓に近い。これは立地と連動するものだろう。石の利用もこれにかかわるのかもしれないが、石塚古墳の場合、石が用いられていなかったとする点については保留しておく。

現時点で、石塚古墳の成立をどのように考えることができるのか、また楯築墓との関係をどのように理解すべきであろうか。石塚古墳築造に際し、楯築墓を参考にした蓋然性をまず認めたい。2世紀中頃の纏向遺跡からは吉備の土器が出土しているところであり、また西谷3号墓の墳頂から吉備や北陸の土器が出土するように、この頃の広域地域圏の為政者間で、埋葬儀礼にあたって人が行き来するような関係をもっていたと考えられるからである。

しかし、石塚古墳は、河内平野や奈良盆地を本拠とするヤマト国の弥生墓制にしたがい、平野部に周溝を掘ることで画され、前方部は二方向でなく、一方向とし、前端にむかって広がる形状としており、楯築墓とは違うものを生み出している。共通するのは突出部（前方部）をもつ円丘墓を造る点にある。大型円丘墓であることが共通することは重要であるが、楯築墓が吉備の弥生墓制の延長になく、讃岐や播磨で見られた円丘を新たに採用して独自性の強い大型墓を築造したのであれば、纏向石塚古墳も同様に考え得る。新たにヤマト国王墓を造り上げるに際し、立地や墳丘の画し方はヤマト国の伝統にしたがい、先行する楯築墓を参考として円丘墓を新たに採用し、前方部を一方向とする、ヤマト国の主体的な選択により決定したのではないか。楯築墓との関係をひとまずこのように理解し、前方後円墳はヤマト国が産み出したものと考えたい。

(7) 小括

以上、長々と議論を重ねたが、石塚古墳に先行するヤマト国王墓の存在も想定しておく必要があり、それが不明な現状では、前方後円墳が石塚古墳以前のヤマト国王墓の展開のなかでたどりうる蓋然性も棄却すべきでない。その上で、前方後円墳の出発が石塚古墳であるとしても、議論を重ねてきたように、楯築墓を参考に墳丘規模の点からも影響を受けつつ、ヤマト国がまったく独自にとはいえないが主体的に造り上げたものと考えることができる。前方後円墳の成立は畿内ヤマト国にあるというのが結論である。

2世紀第2四半期頃から纏向遺跡の建設が進行しており、新たな本拠に、それまでにない大型墳丘墓を造り上げることが構想され、この時に新仕様の前方後円墳を創出したとみる方が妥当かもしれない。纏向遺跡に各地の人々が集まることが始まり、地域圏相互が孤立的で競合関係にあったとみることは適当ではなく、一定の連合関係が萌芽しつつあると考えられるが、しかし土器の独自性もまた顕著であり、それぞれの地域圏の維持を図っている時期のことであり、大型墳丘墓の築造も

それを目的としていると考えられる。纏向遺跡はヤマト国の本拠として新たに建設されたものであり、また当時のこうした時代情勢を考えれば、纏向石塚古墳はあくまでもヤマト国が造り上げた王墓であると評価すべきであろう。

そして、前方後円墳がヤマト国で誕生したことを前提として、纏向型前方後円墳とよばれるもののなかで、墳丘表飾や埋葬施設などの展開過程を追求する必要がある。その際、3世紀以降については、倭国という枠組みができあがっているため、他地域に起源をもつ要素であっても、そうした条件下における採用であることを考慮すべきであろう。

⑥……………古墳時代の定義

(1) 古墳時代とはなにか

3世紀前半の西日本社会は、纏向に生まれた前方後円墳を共有する関係が成立し、画文帯神獸鏡という中国鏡が分配され、また交易拠点を紹介し各地の人々が頻繁に往来することが進んでおり、その姿は〈魏志倭人伝〉にある邪馬台国に約30の国がしたがうという倭国の姿と重ねることができる。邪馬台国に至る経路の解釈の点でも〔山尾1983〕、「銅鏡百枚」が三角縁神獸鏡であることから〔福永2005〕、邪馬台国は畿内ヤマト国に比定できる。

したがって、考古学的な現象と〈魏志倭人伝〉の記述を結びつけることができ、2世紀後葉に倭国乱が生じ、長引く戦争を終結させるために、倭国という枠組みを作りだしたと考えることができる。卑弥呼共立は神功紀から201年と考えている〔岸本2011〕。

これにより、弥生時代の地域圏をいくつも含む広範囲をまとめる政体が生まれ、倭国王のもとに西日本諸地域がまとまる秩序—倭国という枠組み—が成立する。当初の倭国は瀬戸内で結ばれる地域に限られるが、これが3世紀後半には急速に列島規模におよび、東北南部から南九州までの枠組みへと伸張する。その出発点が3世紀初頭であり、これにより地域圏が割拠する弥生時代から、倭国王を「共立」する合意により、それらが結びつく社会関係ができあがる。これを日本史における重要な画期と考え、古墳時代として区分する。

倭国誕生＝倭国王推戴＝倭王権成立により、「倭における国家形成の時代」として古墳時代を定義することとする。2世紀までが弥生時代、3世紀からが古墳時代である。

倭国乱を介しての2世紀と3世紀の転換、すなわち倭国成立を画期とする理解は〈魏志倭人伝〉に依拠する。この転換を示す考古学的根拠が求められるが、瀬戸内で結ばれる地域における前方後円墳の出現がもっとも端的な根拠となろう。

(2) 何をもって古墳とよぶか

古墳時代は「倭における国家形成の時代」であり、考古資料としての指標としては前方後円墳の成立と廃絶をもって画することが適切である〔近藤1983〕。古墳時代＝前方後円墳の時代ではあるが、一方で、時代区分の名称として定着している「古墳」という用語があり、これは前方後円墳にとどまらない。基本的には、通例通り、弥生時代の産物は弥生墳丘墓、古墳時代以降のものを「古墳」

とよぶこととする。ただし、前方後円墳そのものは、弥生時代の2世紀中葉のヤマト国王墓にさかのぼる。いまのところ石塚古墳と勝山古墳であるが、この段階は一地域の墓制であり弥生時代のものであり、墳形が共有される段階以降が古墳時代となる。

整理すると、時代区分については、2世紀後半の評価とかかわるが、現時点では〈魏志倭人伝〉に依拠し、卑弥呼共立による倭国成立を画期として区分する。これ以降、ヤマト国王墓であった前方後円墳の共有が始まると見通している。ただし、前方後円墳そのものはヤマト国王墓として2世紀にさかのぼる。本質はヤマト国王墓が、倭国で共有される墳墓形式になることにあり、それが考古学的な時代区分ともなる。2世紀のものを前方後円墳とよぶか、弥生時代の一地域の墳墓形式であるから前方後円墓とよぶかは、あまり重要なことではない。⁽¹¹⁾

とはいえ、実際の各地の墳墓に向かうとき、何をもって弥生時代の墳丘墓とし、また古墳とするかという問題が横たわる。遺跡としての墳墓を仕分けるとき、先の定義からすると、弥生時代なのか古墳時代かが問われることになるが、3世紀初頭の庄内3式期以降のものを機械的に古墳とよぶことは適切でない。3世紀前半にあって倭国の枠組みに入っているのは瀬戸内で結ばれる地域にとどまり、東日本には前方後方墳が築かれ、山陰地域では四隅墓が築造されている。3世紀後半に入っても、それぞれの地域で倭国の枠組みに参画する時期には差がある。古墳時代を倭国成立による国家形成の時代とする定義からも、前方後円墳の受け入れや中国鏡その他の器物の副葬など、明瞭さの程度はあれ、倭国という新たな枠組みがおよぶことをもって、各地においてどこから古墳と呼ぶかを判断していくほかないであろう。

⑦……………倭における国家形成論のために

倭国成立のプロセスを新しい年代観をもとに描き、一定の見取り図を提示する目的は、以上までの通りである。最後に、国家形成に関するこれまでの言説を意識し、こうして始まった古墳時代の内実として筆者が理解していることをもとに、倭における国家形成の問題にふれたい。

(1) 2世紀後半のヤマト国の求心性

2世紀第2四半期の頃、ヤマト国の本拠として纏向遺跡の建設が始まる。そして、それを主導したであろうヤマト国王の死没にともない、それまでにない約100mの前方後円墳である石塚古墳が2世紀中頃に築造される。2世紀後半にかけて、纏向遺跡には各地から人々が往来し、逆に各地の交易拠点を介して畿内の人々が広く動いている。こうした広域のネットワークが、2世紀にできていることは重要である。ヤマト国本拠の纏向遺跡は、こうした人々の集散の核となっており、人・モノ・情報が集まっていることは間違いない。

新たな年代観による纏向遺跡の2世紀への遡上は、倭国形成前史を考える上できわめて重要である。纏向遺跡への往来からうかがえるように、ヤマト国は2世紀後半に既に求心性をもっていたことになり、倭国乱についても、こうした瀬戸内を介したネットワークができあがっている文脈の中で解釈しなければならない。『後漢書』によると、中国から倭国および倭国王と認識される実態が2世紀初頭には生まれており、ヤマト国を盟主とする枠組みが2世紀初頭にさかのぼることさえ考

えておく必要がある。倭国乱はこれを覆そうとするものであったのかもしれない。しかし、3世紀初頭の倭国王共立は、基本的には2世紀の枠組みを維持することで決着した。倭国王帥升については、断片的な記事で、そこに見える中国側の倭国という認識がいかなるものであったか、いまのところ判断は難しい。考古学的に2世紀史を解明していくほかあるまい。

(2) 3世紀初頭の倭国形成が出発点

倭国乱については、瀬戸内で結ばれる地域間のイニシアティブ争いと考えられ、これが鉄器の安定的確保をめぐる競合であったとの見方が有力である〔都出編1998〕。

これを契機に倭国という枠組みができ、中央権力が初めて誕生する。長引く抗争のなかで、利害を調整するため上位権力を設けることが合意されたのであろう。纏向遺跡は弥生時代のヤマト国の本拠であったが、ここに倭国の本拠となる。

共立された卑弥呼が何者なのか、ヤマト国王とは別に、倭国形成に合意した諸地域のなかから推戴されたとの見方もある。しかし、2世紀後半のヤマト国は既に求心性をもち、3世紀になっても纏向遺跡はそのまま存続し、前方後円墳は引き続き築造され、さらにその共有へ進む。卑弥呼そのものの出自を判断することはできないが、いずれにしてもヤマト国を盟主とすることで合意されたものとみられ、ヤマト国が倭国を統率する中央権力に上昇したと考えられる。

ただし、卑弥呼が「共立」されたとの記述から、ヤマト国が圧倒したと理解することは誤りであり、倭国という枠組みができあがる際に、ヤマト国が盟主とはなるが、この枠組みに参加する諸地域が運営に関与することはありうるだろう。3世紀前半の纏向型前方後円墳あるいは箸墓古墳に、他地域で出現・定着した要素が加わっていることが指摘されており〔北條2000b・寺澤2000〕、そうしたなかに諸地域に関与を想定することは妥当であろうが、前方後円墳がヤマト国王墓として出現し、基本的にそれが継承・発展すると理解し得ることを念頭に置く必要がある。

ヤマト国の倭国王は、倭の代表権者であり、中国王朝の承認対象である。3世紀初めに公孫氏が楽浪地域にも進出し新たに帯方郡を設置し、〈魏志韓伝〉によれば韓・倭は帯方に属したという。公孫氏政権に対し、共立されて間もない倭国王が朝貢し、帯方郡に属すと記される外交関係をもち、画文帯神獣鏡がヤマト国にもたらされる〔岡村1999〕。

鏡の授受や墳形の共有から考えると、各地の代表者が集まり倭国王と対面するような関係も既に成立していたと考えられる。纏向にある前方後円墳は引き続き100 m規模を保ち、瀬戸内で結ばれる地域に現れてくる前方後円墳との格差は大きい。それが制度的といえるかどうかは検討が必要だが、格差は明瞭である。画文帯神獣鏡の面径や量もこれと同様である〔福永2001〕。倭国の枠組みに参加した首長の序列化はただちに始まっている。

〈魏志倭人伝〉によれば、卑弥呼治政の晩年に、倭国の枠組みの外にあった東海地域の勢力と考えられる狗奴国との戦争が起こっているが、それまでの約50年間、こうしてできあがった倭国内部の不安定を示すような記述はない。倭国という新たな枠組みはひとまず維持され、ヤマト国の倭国王のもとに各地域勢力を一定のコントロール下に置き、それぞれの利害を調整する機能は成功したといえる。伽耶の鉄を加工した鉄器の統制は効果を上げ、各地の勢力にとっては、必需材である鉄器を安定的に入手し、また中国鏡などを得ることができたのであろう。

3世紀前半において、纏向遺跡の整備や纏向諸墳の王墓造営に労働力の提供がなされたかどうかはわからない。しかし、初代倭国王墓である箸墓古墳については、箸墓型前方後円墳の存在から生前造墓とみられ、3世紀中頃までに墳丘を造り上げていると考えられ、その造営に各地からの労働力の参加を考えてもいいであろう。3世紀後半の事例になるが、桜井茶臼山古墳の造営に関わる遺跡ではないかとされる城島遺跡で、多くの鋤が出土し、東海系や山陰系の土器が多数出土している[清水1991]。なお、纏向遺跡をはじめ各地の交易拠点とされる遺跡から出土する土器の大半は炊飯具の甕であり、米と甕を持参しての労働を思わせる[岸本2006]。纏向遺跡には各地から諸階層の人々がやってきているであろうが、使用者のようなものは少数であろうし、召し出される技能者も少ないと思われ、多くは労務に従事したと考えられるかもしれない。恒常的なものでなく、その都度の臨時的徴発が累積したものであろうが、纏向遺跡から出土する外来系土器の多さは、倭国に結びつく諸地域からの労役の比重が大きかったことを示すように思われる。

(3) 前方後円墳共有システム

箸墓古墳の築造とそこへの初代倭国王の埋葬は、参列した者に倭国王の地位を強烈に印象づけたに違いない。以後、前方後円墳共有システムが本格的に発動する。

各地の前方後円墳は自立した地域権力の存在を示す。前方後円墳の被葬者の選別は、佐紀政権下の4世紀中頃に顕著になるが、それまでのオオヤマト段階では、20 mや30 m規模の前方後円墳の存在や総量の多さから、基本的に首長の地位がそのまま認められたことを示す。しかし一方で、そこには倭国王墓の規範にもとづく統制があり、墳丘規模には約7 m刻みの細やかな格差が用意された[岸本2004b]。これが倭国王一代ごとに繰り返された。各地域首長は、代替わりごとに倭国王との関係を更新する必要があり、墳丘規模決定の査定があったと思われる。

讃岐型前方後円墳や日向型前方後円墳といった、倭国王墓を規範としたとはいえ、地域の伝統的墳形として築造された前方後円墳もある。しかし、前代とは異なる前方後円墳を導入することに加え、そこにも墳丘規模の格差は持ち込まれている[岸本2004b]。オオヤマト段階は、弥生時代に形成された大小・強弱ある地域社会がそのままに倭国に結びついたもので、前方後円墳は波及するものの地域性が強いことは当然である。地域型前方後円墳を展開させる地域において、そこでの墳丘規模の差は地域内の序列によるものと考えられ、地域に任されていたであろうが、それでも、例えば最大規模墳の大きさなどが決められたなかでの裁量であったのかもしれない。

(4) 統治システム

王宮や王墓の建設といった奉仕は基本的には整備充実していくと考えられ、これにあたる技術者は恒常的な存在になったであろう。王宮の警護も必要であるし、獣肉・鳥肉・魚・蔬菜といった、米以外の食料供給も必要であり、調理者を含め、内廷組織も整えられるであろう。

3世紀後半には、東日本をはじめ列島の各地首長が倭国の枠組みに加わるので、その数は一挙に増大し、用意する威信財の数量も激増した。地域首長に分配する各種威信財などをそろえ、生産体制を整備していることは、下垣の整理に詳しい[下垣2012]。鉄鍛冶、青銅器鑄造、玉作、石製品加工、木工、皮革製品、漆塗り、顔料作りなど、その生産統制と検品、職人の維持や労務管理などの体制

が整えられていくであろう。古墳時代前期においても、相当の種別の職人のかかえ、彼らを統率する体制があったとみるべきである。

王権に結集する数多くの地域首長を把握し統制をはかることが必要であり、そのための王権組織もそれに応じて整えられていったであろう。膨大な各地首長を個々に把握することは困難であり、相似墳に示されるような地域の代表を通してのものと推測される。それでも、墳丘規模、鏡その他の配布物の選択や数量など、それぞれを決定することが必要であり、記録化も必要であろう。王墓築造への労働力提供の割り当てを決め、集まった人員の労務管理なども必要となる。

古墳に身分秩序が表現され、多くの器物がそこに副葬されており、考える具体的材料の多くは墳墓をめぐる側面になるが、それでも上記のようなことが想定できる。そして膨大な威信財が生産されたことが確実であるにもかかわらず、例えば倭製鏡の鑄造工房は明らかになっていないのである。したがって、一般的な鉄器や木製品、土師器、織物といった必需材その他の生産についても、遺跡の実態が十分判明していないからといって、それをもって生産体制の整備が遅れていたと判断するわけにはいかないだろう。

この時期の地域首長の統制、王墓築造の遂行、威信財および必需財の生産体制など、王権中枢における組織・体制の実態は不明ながら、前方後円墳の分布域拡大にうかがえる倭国の枠組みへの参画が列島規模に展開するなかで、それを支える体制整備が進んでいくと考えられる。

(5) 軍事力の整備

卑弥呼晩年には狗奴国との戦争が生じる。狗奴国は濃尾平野低地部と目され、伊勢・三河を含めた東海地域を中軸に、北陸や関東にかけての東日本において、倭国と併存する連合関係を広げている〔赤塚 1996〕。この東西対決は重要な戦争であったであろうが、衝突をむかえるに至るまでの3世紀前半の状況からすれば、倭国連合がやはり優位にあったと思われる。この時の戦争の実態や、倭国連合側の戦闘集団の内実はなかなか想定しにくい。

しかし3世紀後半における、古墳の副葬品に見られる鉄製武器の集積は著しい。倭国執政王墓であるメスリ山古墳では副室武器庫が見つかったが、これと同様と思われる副室は桜井茶臼山古墳にさかのぼるようである。メスリ山古墳のやりや銅鏃が100本単位の数量であるように、倭国中枢部における鉄製武器の大量集積は確実である。軍事力の組織化は不明だが、軍事力そのものの整備は、大量の武器生産とその集積保有にうかがうことができる。

倭国内部の反乱は『日本書紀』から類推する他ないが、多くは王権をめぐる争乱であり、5世紀になると葛城氏や吉備氏の弾圧に示されるような地域権力を押さえ込む戦争に進む。3世紀中頃の狗奴国との戦争のあと、地域権力が倭王権に与するに際しての抗争や、与したのちの反乱はあまりなかったのではないかと。前方後円墳の急速な波及に示される倭国の拡大は著しく、抵抗はあまりなかったように思われる。倭王権を頂点とする倭国の秩序は、第3代倭国王である崇神の頃には確立するのではないだろうか。倭国という枠組みは後戻りしないものとなり、畿内の王権から主導権を奪うといった国家的秩序を破壊するような反乱は生じなかったであろう。

実際の戦争にかかわる面としては、4世紀中頃に対外派兵が始まり〔岸本 2010a〕、倭国の軍事力は国内秩序の維持よりも、朝鮮半島における各国の抗争に組み込まれることにより進展する。

国内の紛争としては、主に王権内部の主導権争いとなる。そのために、王権中枢は多量の武器を集積させ備えを固める必要があったが、倭国内の組織的反乱はあまり想定されないため、倭国としての公的な軍事編成が整えられることはなかったのではないだろうか⁽¹²⁾。そもそも、国内にしても国外にしても、そこに参集する兵力は、有力者がそれぞれ兵隊を引き連れての臨時的編成であることがもっぱらであり、近代国家の軍隊のようなものを想定することはできない。

(6) 地域権力の従属

倭王権と地域権力の関係の変質は4世紀中頃にある〔岸本2010b〕。対外派兵を進める必要から、基本的に自立した各地首長が緩やかに結びついているそれまでの関係は、軍事的協力にもとづく特定首長との連合体制に入る。5世紀にはいると、軍事的提携にもとづく連合体制はピークを迎えるが、既に前方後円墳がなくなる地域もあり、倭王権に従属する地域も生まれている。

5世紀中頃には、河内政権内部の主導権の交替もあり、5世紀前半までの連合体制からの脱却がめざされる。大和西部の葛城氏、備中の吉備氏など、5世紀前半までの有力豪族は押さえ込まれる。5世紀中頃から後半にかけて、それに代わる地域首長を起用する場合もあるが、この段階で有力前方後円墳がなくなる地域も多く、倭王権への従属が進んだと考えられる。そして帆立貝古墳や大型円墳が卓越する。前代までの有力首長系譜が大型円墳に転じる事例のほか、新興勢力として現れる場合が多く、これらは前方後円墳の被葬者と異なり王権に直属するような形で、中小豪族が起用されたものと思われる〔岸本2010c〕。

一方で、例えば埼玉古墳群など、この時期以降に前方後円墳からなる有力古墳群を形成するものもあり、これらは、ヲワケ臣が王宮に出仕しているように、王宮の維持・警護に地域首長自身がかかわる直臣層の形成と考えられようか。ただし、「杖刀人」・「典曹人」といった特定の職掌を担うこうした存在が、雄略朝で初出するものかどうかは不明である。

いわゆる連姓氏族である大伴氏や物部氏あるいは中臣氏は、河内政権のなかで役割を増し、王権にかかわる護衛や兵器等の管理あるいは祭祀などにあたる集団として台頭する。彼らに統率されるトモといった存在は、地域の有力前方後円墳の廃絶と表裏の関係にあるように思われる。そうすると、こうした存在は河内政権成立当初からありうるのではないだろうか。佐紀政権下に有力古墳を築いていた首長系譜は、ほぼ河内政権の出現によって地域での地位を失う。河内政権と結びついた首長系譜が新たに起用され大型前方後円墳が現れる地域もあるが、例えば、近江、西摂津や北河内、和泉、西播磨保川流域など、中期前半段階に大型前方後円墳がなくなる地域も少なくない。こうした中期の地域大首長不在の地域は、王権との関係は従属的關係に入っていたと考えられ、こうした地域からトモを集める体制が既に始まっている可能性がある。こうしたあり方は、まずは畿内内部やその周辺から始まるのであろう。そして、允恭即位による河内政権内でのイニシアティブの交替以降、5世紀前半期の地域大首長もまた多くが後退する。こうしたなかで5世紀中頃から後半にかけて、王権中枢をささえるトモの組織化が一層進んでいったと考えられる。

(7) 小括

3世紀初めに、倭国という枠組みができ、中央権力が初めて誕生する。日本の国家形成史におい

て決定的に重要である。「弥生時代と古墳時代前期の差を、首長制と国家というように決定的と評価せずに、同じ首長制の中での小段階差とみなす」岩永省三の見方が[岩永2002]、世界基準の理論から妥当なものであるとしても、倭の国家形成にとって倭王権の形成が出発点であることは疑いない。倭の国家形成において、北部九州から瀬戸内沿岸諸地域、そしてヤマト国という、地理的にも広域にわたり、日常の生活圏をはるかに越える地域圏相互が、一定の秩序のもとにまとまることは、個々の地域圏が強固になり、徐々にその領域を拡大していくといったものとは質的に異なる飛躍であり、こうした統合関係ができあがったことが最も重要であり本質的である。

一定以上の人間が集まり社会を構成するとき、その安定と秩序を維持するため一定の統制にしたがうことが必要であり、多くの場合、リーダー層を生み出し、公権力というものが生まれる。集団の規模はさまざまであり、大きくなるほど、大集団を統率するための仕組みも整えられ、リーダー層の権限も増大しよう。国家というものは、そうした人間集団の規模で線が引けるものではないのだろうが、しかし維持のための恒常的組織が重要となり、それは規模が規定していく側面もあるに違いない。弥生時代に考えられている地域の統合は、基本的に河川水系ごとに成立した農耕社会の単位が、次第に周囲を糾合し広域の統合を果たしていくものである。しかし、3世紀初頭に生じた事態は、令制下の行政区分でいえば、郷程度だったものが郡程度になり、さらに国の規模にまで至ったというものでなく、広域にわたって点々と存在していた地域圏が、一挙に同じ枠組みに連なる秩序を作り上げたという点で、弥生時代とは質的に異なっている。

日本の国家形成にとって、瀬戸内で結ばれる西日本規模のものとはいえ、多くの国々が、その上に立つ倭国王を戴くことに合意し、互いの利害を調整する政体を作り上げたことが、決定的に重要ではないだろうか。国家の成立をどこに置くかは識者に委ねるが、これを倭の国家形成の出発点として評価しない言説を認めるわけにはいかない。倭国乱の渦中であって、関与する各国のなかで新たな枠組みが合意されたこと、それによって倭の国家が生まれたのである。

そして、こうして倭国という枠組みが一旦できあがると、それを維持していくために、さまざまな仕組みの整備が進んでいく。王権は不安定で動揺を繰り返すが、古墳時代を通じて中央権力が卓越していくという大筋に間違いはないだろう。弥生社会から大きく質的に違う秩序を作り上げたことが本質であり、制度はあとから充実していくものである。

古墳時代史としても、国家形成の議論においても、古墳時代の諸過程を明らかにし、画期の設定や成熟度の段階を捉えていくことが求められる。その画期を5世紀前半とみるのであれ、5世紀後半であれ、6世紀であれ、この枠組みにおける成熟度を議論しているものと認識している。倭の国家形成史を論じる上で、3世紀初頭を国家成立とし（あるいは出発点とし）、既に出そろっている指標に即して、古墳時代における内実を明らかにし、それらを総合化することで、成熟度の段階設定をする方が、よほどわかりやすいし、実態に即した有益な議論になろう。

おわりに

改めてまとめるよりも課題を明らかにしておくことが有益であろう。

まず、¹⁴C年代計測データの充実が望まれる。冒頭で示した畿内における年代的枠組みも、とく

に2世紀についてはさらに精度を上げることが望まれる。古墳時代を専門とする筆者には、布留2式以後、古墳時代中期までの年代を是非とも知りたいのであるが、それは措くとして、本論の関係でいえば、弥生時代後期から庄内式にかけて、各地での計測が進むことにより、その対応関係が明らかになることが、なによりもこの時代を考える上で重要である。

纏向遺跡の形成が2世紀第2四半期には始まり、纏向石塚古墳が庄内1式初頭とすれば2世紀第3四半期でも中頃に近いとの判断の下に、議論を組み立てた。新たな年代測定データにもとづく見取り図を描くという本稿の目的から、現状で公表されているデータを自分なりに点検した上で導かれるこの年代観にもとづき、議論することを課題としたからである。それが妥当であるかどうかは、今後、庄内式各段階の年代が精度高く明らかになることで判明しよう。訂正しなければならないなら再論する。しかし、庄内式が2世紀に食い込むことは動かないと考えられるので、本稿での議論や問題提起のすべてが破綻することにはならないと思う。

纏向遺跡成立について、倭国形成にともなう王都建設という理解は改めなければならない。纏向石塚古墳の評価もこれと同様であり、前方後円墳の起源の議論に発展する。ヤマト国王墓として生まれたと考えたが、吉備の楯築墓との関係については、これからも思考を重ねたい。ヤマト国王墓は、楯築墓と異なり、その後も後続墳を生みだし、ホケノ山古墳さらには箸墓古墳へと至る。3世紀前半以降の前方後円墳において、新たな要素が付加されていく過程をたどり、倭国に結びついた吉備や播磨、讃岐・阿波といった地域との関係を整理することが必要である。一方的に各地の墓制の要素を取り込んだとみるのではなく、そこに表れている地域間の関係を読み取ることが必要であろう。3世紀前半の各地の纏向型前方後円墳についても、纏向に築造されたヤマト国王墓の波及と考えることが妥当であると考えが、個々の検討が課題である。

今回の検討を通じて2世紀の実体解明が大きな課題であることを認識した。纏向遺跡がさかのぼることは、当然、そこで出土する他地域の土器の多さから考えられてきた、各地からの人々の往来もまた2世紀の現象として理解しなければならない。庄内式期の現象として読み取ってきたことの多くは、2世紀に置いて考える必要があり、3世紀以降の倭国の枠組みは、倭国乱後に初めて生まれたものでなく、2世紀後半の中で形成にむかっていたとみることが可能である。

国家形成の議論については、根拠のない思いこみを羅列したと受け取られても仕方がない。しかし、制度的な整備が重視されているが、それはきわめてとらえにくい。法円坂の倉庫が見つかったも、そこに何が蓄えられ、それはどこからどのように集められたのか明らかにできないが、税物も既にあったのかもしれない。租に相当する収穫物の貢納は農耕社会にともなうもので、倭国成立により発生したものではあるまい。古墳時代の賦課の中心は、まずは労働力の提供が主体を占め、特産品の貢納などは後半期になるのかもしれない。

王権中枢の組織をとらえることはさらに難しい。王権拠点の遺跡の状況が明らかになり、その構造や規模が明らかになっても、そこでさまざまな職掌に従事していた人々がどのように集められ組織されていたのかは明らかにならない。稲荷山鉄剣などの希有な文字資料に頼らざるをえない。しかし、威信財や必需財の生産といった、副葬品や遺跡からとらえる生産活動の面だけでなく、列島規模の諸首長を一定の統率下に置き序列づけていくこと、すなわち国家の枠組みを維持するための、いわばこの時代の統治ともいえる部分にかかわる人員も、早くから生まれていたと考えるべき

であろう。それが次第に充実していき、慣行として定着し、組織立っていくとは想像はできても、国造・官家・部民といった研究が進む6世紀はともかく、5世紀以前についてそれをとらえることは難しいだろう。そういう現状において、一線を引き、理論的にここからが国家といえるという判断が可能なのだろうか。そして、そもそも体制維持のための仕組みが制度的なものになることが、ほんとうに国家を考える上で重要なのだろうか。制度とは仕組みが慣行化し定着することそのものであり、それが文章化されなくても、みなが共有し違反すれば懲罰されるものに定着すれば制度といえるだろう。そうした仕組みは、倭国ができた時に、それまでのやり方を拡大するだけのものであれ既に存在し、規模に応じたものに調整されていったであろう。制度も重要ではあるが、倭国という枠組みこそが国家の本質ではないだろうか。

註

(1)——庄内式が2世紀代にさかのぼることは、木製品等の年輪年代値もふまえ、大賀克彦と堀大介が早くに明示している〔大賀・堀 2003〕。

(2)——¹⁴C年代に通じておらず、方法論にさかのぼっての議論はできないが、1990年代の三角縁神獣鏡の研究にもとづく古墳の年代観と、布留式期については整合的であり、一定の信頼性があると考えており、その立場から、公表されているデータについて、筆者なりに検討を加える。各データの配列は、土器様式の連続をもとに想定される位置の中で、Jcalの帯の中心に位置付くよう割り振ったものである。歴博の正式報告では〔春成ほか 2011〕、まとめの図25に凡例がなく、2009年の日本考古学協会での発表要旨に掲載された図〔新納 2009〕によった)を参考に、プロットされたデータと資料番号との突き合わせを行った。

(3)——纏向遺跡は布留2式期になると、遺構・遺物が希薄になり、王権本拠は佐紀に移る。宮内庁の調査で行燈山古墳から出土した小型丸底土器は布留1式と2式の境界に位置づけられる。行燈山古墳は318年没の崇神墓である蓋然性が高いと考えており〔岸本 2004a〕、このことから布留1式と2式の境は420年頃と考えてきた。

(4)——おおまかな年代観は得られたが、今後、さらにデータの蓄積が望ましいことはいうまでもない。とくに河内の資料の計測が必要である。「第Ⅴ様式土器」・庄内式ともに河内の方が編年として確立している。大和の場合、種々の編年案が並立し、その併行関係を確認することも、土器の専門家でなければ理解しがたい。庄内式の成立についても、河内と大和の限られた遺跡で出現するので、庄内式の観点から区分された土器編年と、一般集落における「第Ⅴ様式土器」の土器編年との対応が問題となろうし、とくに庄内0式≒大和Ⅳ4式とされる時期

前後の理解については、庄内薨が河内で早く大和で遅れるとの見方を含めて、一定の整理がなされているものの〔森岡・西村 2006〕、理解は容易でなく、依拠していいのかどうか判断できない。また、「第Ⅴ様式土器」研究と古式土師器研究が乖離していることも、困難さを生じさせているように思われる。

(5)——なお、中河内と大和南部の存続する拠点集落もまた、内部の変質が進んでいたことも考えておく必要がある〔樫考研 2005〕。

(6)——なお、中河内と大和南部が主導勢力とみだが、大和川で結ばれる親縁性がもたらあるにせよ、弥生時代の地域としてはもちろん別であり、それが弥生後期の段階でどのような関係にあったのか、連合的な関係とみるのか、一体的なものに進んだのか、庄内式期以降も含めて、その理解は重要だが判断は難しい。

(7)——纏向型前方後円墳については墳形の観点からの整理が必要であるが、纏向にあるものでも、石塚古墳以外の前方部の形状はまだ明らかでない。ここでの纏向型前方後円墳とは、3世紀前半以前にさかのぼる可能性のある原初的なものといった意味である。纏向にある諸墳の築造時期に関する土器編年上の位置については、さまざまな意見があることは承知している。現時点において、それぞれの古墳出土土器を網羅的に取り扱った上で、総合的な評価を行っている橋本の見方に依拠する。

(8)——大久保徹也氏にご教示をいただいた。

(9)——吉備と畿内の土器編年との対応関係については、大きな齟齬があり、その調整が課題とされている〔森岡・西村 2006〕。

(10)——ヤマト国形成後の、各地の解体された拠点集落にいた首長たちの墳墓も考えておかなければならないが、弥生後期の豪族居館は未解明である。

(11)——楯築墓も纏向の2基もあくまでも弥生時代の古備の王墓でありヤマト国の王墓である。ただし石塚古墳と勝山古墳を、矢塚古墳などと区別することは難しい。石塚古墳と勝山古墳は、弥生時代のヤマト国の王墓である段階と評価するが、これらについても例外的に古墳とよぶことにし、「古墳ではない前方後円墳」とすること

を避けておく。

(12)——令制において各国に軍団を設け、正丁から一定の割合で兵士を挑発したが、792年には廃止される。唐の制度に手本に導入したものの、こうした恒常的な軍隊保持は早くに停止され、少数精鋭で要地警護・儀仗・護衛等の任務にあたる健児は警察権的な役割に後退する。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1996「前方後方墳の定着—東海輕文化の波及と葛藤—」(『考古学研究』第43巻第2号, pp.19-35)
- 赤塚次郎 2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」(『考古資料大観 2 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』小学館, pp.33-40)
- 岩永省三 1997『歴史発掘 7 金属器登場』(講談社)
- 岩永省三 1998「青銅器祭祀とその終焉」(『日本の信仰遺跡』〈奈良国立文化財研究所学報〉第57冊, pp.75-99)
- 岩永省三 2002「階級社会への道への路」(『古代を考える 稲・金属・戦争—弥生—』吉川弘文館, pp.75-99)
- 大久保徹也 2006「讃岐及び周辺地域の前方後円墳成立時期の土器様相」(『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター, pp.423-438)
- 大賀克彦・堀 大介 2003「凡例」(『風巻神山古墳群』〈清水町埋蔵文化財発掘調査報告書〉Ⅶ, pp. ix-xiii)
- 岡村秀典 1986「中国の鏡」(『弥生文化の研究 6 道具と技術Ⅱ』雄山閣, pp.69-77)
- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』〈歴史文化ライブラリー〉66 (吉川弘文館)
- 岸本一宏 2009「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」(『弥生墓からみた播磨』〈第9回播磨考古学研究集会の記録〉, pp.1-78)
- 岸本直文 2004a「行燈山型の前方後円墳」(『玉手山7号墳の研究』〈大阪市立大学考古学研究報告〉第1冊, pp.125-136)
- 岸本直文 2004b「前方後円墳の墳丘規模」(『大阪市立大学大学院文学研究科紀要 人文研究』第55巻第2分冊, pp.27-70)
- 岸本直文 2004c「西求女鏡群の歴史的意義」(『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会, pp.339-348)
- 岸本直文 2006「古墳時代における都市形成」(『大阪および日本の都市の歴史的発展』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター, pp.3-16)
- 岸本直文 2010a「玉手山1号墳と倭王権」(『玉手山1号墳の研究』〈大阪市立大学考古学研究報告〉第4冊, pp.221-254)
- 岸本直文 2010b「倭国の形成と前方後円墳の共有」(『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』吉川弘文館, pp.14-46)
- 岸本直文 2010c「河内政権の時代」(『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』吉川弘文館, pp.47-78)
- 岸本直文 2011「倭王権形成と鏡」(『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』(学生社, pp.151-182)
- 岸本道昭 1999「播磨弥生社会はどう変わったか」(『みずほ』第30号, pp.90-100)
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』〈日本歴史叢書〉(岩波書店)
- 清水真一 1991「土木用木器の出土状況についての一考察」(『桜井市城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書』〈桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書〉9, pp.45-48)
- 下垣仁志 2012「考古学からみた国家形成論」(『日本史研究』600号, pp.3-28)
- 菅原康夫 2011「阿波の集落と初期古墳」(『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』(学生社, pp.121-150)
- 高橋 護 1980「入門講座 弥生土器 山陽1」(『考古学ジャーナル』No.173, ニューサイエンス社, pp.22-26)
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」(『日本史研究』第343号, のち『前方後円墳と社会』塙書房, 2005年に収録, pp.49-94)
- 都出比呂志編 1998『古代国家はこうして生まれた』(角川書店)
- 寺澤 薫 1979「大和弥生社会の展開とその特質—初期ヤマト政権成立史の再検討—」(『橿原考古学研究所論集』第4号, 吉川弘文館, pp.39-78)
- 寺澤 薫 1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」(『橿原考古学研究所論集』第6号, 吉川弘文館, pp.35-72)
- 寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』〈奈良県史跡名勝天然記念物調査報告〉第49冊,

pp.327-397)

- 寺澤 薫 1988「纏向型前方後円墳の築造」(『考古学と技術』〈同志社大学考古学シリーズ〉Ⅳ, pp.99-111)
- 寺澤 薫 1989「各地域の併行関係・解説」(『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社, pp.322-327)
- 寺澤 薫 2001『日本の歴史 02 巻 王権誕生』(講談社)
- 奈良県立橿原考古学研究所 1976『纏向』(桜井市教育委員会)
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2005『ムラの変貌—弥生後期の大和とその周辺—』〈特別展図録〉第63冊
- 難波洋三 2008『シンポジウム 銅鐸の始まりと終わり』(発表資料)
- 新納 泉 2001「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」(『考古学研究』第48巻第3号, pp.56-74)
- 新納 泉 2009「箸墓古墳の炭素14年代考」(『考古学研究』第56巻第2号, pp.1-4)
- 仁藤敦史 2004「ヤマト王権の成立」(『日本史講座 第1巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会, pp.101-133)
- 榎垣田佳男 1998「石器から鉄器へ」(『古代国家はこうして生まれた』角川書店, pp.51-102)
- 橋本輝彦 2006「纏向古墳群の調査成果と出土土器」(『東田大塚古墳—奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査—』〈桜井市内埋蔵文化財1998年度発掘調査報告書〉1, pp.157-181)
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 2011「古墳出現期の炭素14年代測定」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集, pp.133-176)
- 福永伸哉 1998「銅鐸から銅鏡へ」(『古代国家はこうして生まれた』角川書店, pp.217-275)
- 福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』〈大阪大学新世紀セミナー〉(大阪大学出版会)
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』(大阪大学出版会)
- 北條芳隆 2000a「前方後円墳の論理」(『古墳時代像をみなおす—成立過程と社会変革—』青木書店, pp.3-25)
- 北條芳隆 2000b「前方後円墳と倭王権」(『古墳時代像をみなおす—成立過程と社会変革—』青木書店, pp.77-135)
- 藤田三郎・松本洋明 2009「大和地域」(『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社, pp.147-199)
- 松木武彦 1989「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」(『考古学研究』第35巻第4号, pp.69-96)
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』(青木書店)
- 森岡秀人 1998「年代論と邪馬台国論争」(『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館, pp.111-140)
- 森岡秀人 2005「新しい年代論と新たなパラダイム」(『古墳のはじまりを考える』学生社, pp.113-173)
- 森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」(『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター, pp.507-588)
- 山尾幸久 1983『日本古代王権形成史論』(岩波書店)
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内」(『弥生文化博物館研究報告』第3集, pp.119-146)
- 和田晴吾 1986「金属器の生産と流通」(『岩波講座 日本考古学3 生産と流通』岩波書店, pp.263-303)

(大阪市立大学文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年3月26日審査終了)

Processes of Starting the Kofun Period and Building a Nation in the Wa State

KISHIMOTO Naofumi

The development of the study on sankakubuchi shinjukyo (triangular-rimmed mirrors decorated with gods and animals) in the 1990s dated the Hashihaka burial mound to around the middle of the third century. This research results revealed a direct connection between the Wa State described in *Gishiwajinden* (*Account of the Wa* in *History of the Wei Dynasty* written by Chinese) and the Wa Sovereignty and enabled to understand them as consecutive development. This is because it can be considered that the proliferation of keyhole-shaped burial mounds and *gamontai shinjukyo* (mirrors with an image band decorated with gods and animals) throughout the area around the Seto Inland Sea, which can be regarded as the movements of the Wa State described in *Gishiwajinden*, started when Himiko was queen of the Wa State in the first half of the third century. Therefore, the establishment of the Wa Sovereignty with several coexisting Wa kings can be dated to the beginning of the third century. This starting point of the Wa State, which exceeded the regional boundaries of the Yayoi period, marked a turning point of the age. Defined as “the period of nation building in Wa,” the Kofun period can include the first half of the third century as its early stage.

Remaining challenges are to get a clear picture of the Yamato State in the Late Yayoi period, as a leading force in the Wa State, and understand why the Yamato State became the leader of the Wa State after the domestic warfare. On the other hand, since there were exceedingly few iron implements and large-scale burial mounds, some researchers consider that the Wa Sovereignty did not follow as an extension of the Yamato State in the Kinai region but was established by an emerging force in the eastern Setouchi region. There are significant differences of opinion on who established the Wa State.

With regard to the shift from the Yayoi period to the Kofun period, the carbon-14 dating method is suggesting a new framework. The method can reconfirm the date of the Hashihaka burial mound as around the middle of the third century. More importantly, the Shonai pottery is dated earlier to the second century. This means that the formation of the Makimuku site is also dated earlier to before the birth of the Wa State. Therefore, the site can be regarded as the independent establishment of the base of the Yamato State.

Defining the Kofun period as described above, the present article is aimed at giving the latest picture of how the Wa State was established, based on the new view of dating. To this end, the article

covers the establishment process of the Yamato State from the Late Yayoi period to the Kofun period and new perspectives on the Makimuku site, as well as examines the development of keyhole-shaped burial mounds including a comparison between the Tatetsuki mound tomb and Makimuku Ishizuka burial mound.

Key words: Yamato State, Makimuku site, Keyhole-shaped burial mounds, Wa State, Kofun period